

1954年制作の映画『ゴジラ』の諸相

山地良造

帝京平成大学 現代ライフ学部

Various Aspects of the Japanese Film “Godzilla” (1954)

YAMAJI Ryoza

Faculty of Modern Life, Teikyo Heisei University

Abstract

The monograph takes up three aspects of the Japanese film “Godzilla”, which was produced in 1954, that is to say, the first of a series of the 23 films “Godzilla”. One of the aspects is concerned with the national life of Japan, especially, an influence of radioactivity. The theme of the second aspect is thought about from a perspective of folklore. It is an old ceremony of Azteca, a sacrifice to its gods, that is quoted in this chapter. The last aspect is an interpretation of “Godzilla” in a sense of “a text-theory”, which Roland Barthes suggested as a way of literary interpretation. These aspects show that “Godzilla” (1954) includes various points of an argument.

Keywords : Godzilla, radioactivity, folklore, a text-theory, Shinto.

プロローグ

貞観11年（西暦869年）の大地震から千百年以上の時を経て、本州太平洋岸の東北・関東地方を襲った昨年3月の東日本大震災。21世紀のこの大震災とほぼ同じ地域を襲ったあの貞観の大地震からほぼ百年の歳月を経て、平安の都の歌人は次のような歌を詠んだ。

心かはりて侍りける女に人にかはりて

清原元輔（908－990）

契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは

（『御拾遺和歌集』[1086] 所収、島津忠夫＝訳注『百人一首』より、96頁以下、角川文庫、平成9年）

歌の中の「末の松山」とは、いまの宮城県多賀城市にあるとされる山のことであり、貞観大地震の際には多賀城市一帯（当時は国府多賀城）も大きな被害を受けたと言われる。同じく「波」とは、具体的には貞観大地震による大津波のことと解釈される^{注1)}。元輔のこの歌は、後に『百人一首』に収められたため、いまでも人口に膾炙しているもののひとつである。9世紀のあの大地震の文学上の余波は、たしかに現代にも深く及んでいるのである。しかし、このたびの大地震は、貞観大地震と同じく巨大津波を引き起こして甚大な被害を引き起こしたのみならず、防災に遺漏なきはずの現代科学の粹たる福島第一原子力発電所の機能をもこの巨大津波が破壊し尽くした。ここから陸海空に放出飛散した天文学的数値の大量の放射性物質は^{注2)}、これから長きにわたって我が国の自然を汚染し続けることになる。放射能の完全な封じ込めと汚染除去と汚

染源撤去には、一説では十万年単位の時間を要するとされている。このような想像を絶した数値の論議や検討はともかく、我が国は、前世紀に二発の原子爆弾の災禍に遭ったのみならず、今世紀には、原発の破壊による放射能汚染という予期せぬ事態に否応なく直面しているのである。

本論では、米国による水爆実験がひとつの契機となって製作された映画『ゴジラ』（1954）を考察の中心に据えて、スクリーンに映じたゴジラの登場から死に至るまでを論述の展開に即して取り上げつつ、戦争ないし原水爆の悲惨から現代人の死生観の一端に至るまでを論じることを目的としている。

ところで、昭和の歌人土屋文明（1890－1990）は、前世紀後半の東西冷戦のさなかに水爆を主題にして次のようにうたった。

一瞬に亡ぶる水爆をかぶる夜の来るといふのか来ないといふのか

（土屋文明自選『土屋文明歌集』、246頁、岩波文庫、1999年）

本稿執筆現在、大震災から半年を経ているが、福島第一原子力発電所の近隣住民のほとんどが避難生活を送ることを余儀なくされている。報道機関は数十年単位の避難生活の長期化の可能性を伝えていて、このことだけでも原発周辺一帯の被害者の心労は察するに余りある。他方、それにも増して懸念されるのは——旧ソ連のチェルノブイリ原発事故の際に問題となったように——今後、人体に及ぼすであろう放射能の様々な影響である。先の歌人土屋は、水爆投下と放射能拡散の可能性に脅える者の心情を短歌の中に凝縮することのみ専念すればすんだ。しかし、現代に生きる日本国民は、すでに拡散した見えざる放射能と今後否応なく向き合い続けなくてはならない。とりわけ年少者の健康については官民間わず最大限の配慮をして、力持てる者や知恵持てる者に対しては、必要な対策ないし処方を選時かつ適宜講じてほしいと願わずにはいられない。本論では死生観をも主題の一部とする以上、このことを常に脳裡に置き留めながら、以下、映画『ゴジラ』をモチーフにして論じていくこととした。

I. 映画『ゴジラ』における国民生活

映画『ゴジラ』は本来S F映画である。多くの場面に駆使される特撮技術は、S Fの世界を存分に描き出している。S F映画の分野においては、CGや3Dの特撮技術が主流となった現代にあってもなお、『ゴジラ』は特撮映画の古典作品たる地位を保ち続けている。たしかに、ゴジラを迎え撃つ戦闘場面などは、ゴジラの表情や動きがリアルに描写されればされるほど、対ゴジラ実戦部隊の戦闘機や戦車などの模型が貧弱に見えてしまい、観客の側で脳内の補正機能を用いてリアル度をアップする必要がある。こうした弱点は、制作当時の資金的な事情や不自由な資材状況なども大きく影響している。しかし、このような制作技術面からいったん視線を作劇法に転じてみると、むしろリアル度の点からは、作劇法や筋の展開に現代との関連性を十分に指摘することが可能である^{注3)}。

そのひとつの具体例は、ゴジラの出現に対する政治の対応である。映画では、国会内に特別委員会が設置され、ここで未知の怪獣についての報告や質疑などが行われる。特に、事実の隠匿に走ろうとする政府側の委員と、これを阻止しようとする女性議員のやり取りは、情報公開制度が定着しつつある現代との比較に十分耐えるものである。政府にとって不都合な事実を公にしないという姿勢に関しては、これを善意に解釈すれば、国民をパニックに陥らせないためなのだという政府側の大義名分も成り立ちうる^{注4)}。実際、未知の怪獣による災害という学術的見解を受けた政府側は、事の重大性を認識するがゆえに非公表を強く主張するのだが、これに対して、先の女性議員は、重大だからこそ国民に公表すべきであると訴えるのである。つまり重大な事実だから隠すというのではなく、「事実は事実だ」という前提のもとに、事実自体の重大性がここにさらに付け加わるからこそ国民に正確な情報を伝えよと主張するのである。このたびの大震災直後の官邸が発表する情報内容の信頼度が当初から盤石なものでなかったことをいまになって知る我われにとっては、映画のこの場面の素朴な反応として、国会における両者の応酬を「映画は映画だ」と言って容易に割り切ることはできにくいのではないかと^{注5)}。

しかしながら、映画『ゴジラ』の中にはなぜか国の最高責任者たる総理大臣の姿は描かれていない。これには、映画自体が「現実的なものではないから」とか、「元々S F……つまりサイエンスのフィクションなの

だから」という見方も可能であろうが、現代の政権交代後における政治状況の混乱ぶりを見聞きしてきた者からすれば、『ゴジラ』の中に総理大臣はじめ政府首脳を登場させないことによって、かえって、見えざる政権の苦境を如実に伝えるという逆説が成立しうるのであるという解釈も可能となる（『ゴジラ』の制作当時すでに日本国憲法が公布されてから 5 年ほどたち、防衛二法〔防衛庁設置法と自衛隊法〕に基づく防衛庁および自衛隊の発足も、『ゴジラ』の制作年と同じ 1954 年であったことから、文民統制下の軍事上の最高責任者が総理大臣であることは、少なくとも、映画制作に携わる人びとは承知していたであろう。この点、佐藤健志の「ロング・シノプシス『ゴジラ完結編』」と題する一種の『ゴジラ』原作案では、「日本国総理大臣」が登場人物のひとりに加わり、最後の場面で全世界に向けた対ゴジラ戦勝利の「声明」を発している〔『さらば愛しきゴジラよ』、163 頁以下、読売新聞社、1993 年〕）。

また、前述したように、ここに女性議員を登場させて政府側に対し異議を唱えさせていることにも注目したい。いかにも手練手管に長けていそうな初老の政府側委員を追求する役割を若手の女性議員に演技させたところに、戦後の婦人解放運動の成果が反映していると見ることができるからである^{注6)}。

国民生活に直結する国会の委員会が『ゴジラ』の中でこのように描かれていることは、確かに戦後のアメリカ流の民主主義や婦人解放運動の芽生えの反映であると言える。戦後十年に満たない当時の、「古い上着」を脱ぎ去った開放的な空気がここに描き出されたと見ることができる。

しかし、政治の世界の混乱はやがて国民生活の混乱を惹き起こす。ゴジラの出現という未経験の事象に対して、上は政府から下は庶民に至るまで、混乱の極みがスクリーンに映し出される。ゴジラの出現に伴う海のうねりは都市の岸辺の建物に激しく打ち付けていて、大地震による大津波もかくやと思わせんばかりである。港湾施設、鉄道、高圧線、それに無数のビルや家屋がゴジラによって破壊されてゆく。この様子はまるで東日本大震災の現実の二重写しのようなものである。

たまたまゴジラに遭遇した列車は脱線転覆し、鉄道の乗客乗務員はこの脱線転覆のため、あるいはゴジラの暴威のため犠牲となり、市街の多くの人びとはゴジラから少しでも遠くへと逃げ惑い、シナリオの上とはいえ負傷者もいれば落命者も当然いたはずである。ゴ

ジラの一投足ごとに引き起こされたであろう大地の揺れは、映像と音響を通じて映画の観客に対し現実の大災害を想起させるほどの迫真性を帯び、さらには、先の大戦の体験者に対しては現実の戦災を想起させたに違いない。

映画の中の戦車や戦闘機によるゴジラへの攻撃もまた、純然たる戦闘行為という意味では、『ゴジラ』完成のわずか十年前には大東亜戦争^{注7)}として人びとの現実生活の中に確実に組み込まれていたものであった。こうした凄絶な場面は、ほかならぬ水爆によって太古の眠りから覚醒させられたゴジラが、眠りを妨げた人間世界に放射熱線を浴びせて復讐するという設定によって一層強調されることになる。当時の国民にとって二発の原子爆弾を落とされた記憶はここに甦り、破壊の限りを尽くすゴジラの映像は、現代の我われの想像を超える生々しさと観る者の側に迫ったはずである。しかも、『ゴジラ』完成の二年前には第五福竜丸がビキニ環礁の水爆実験によって被爆し、犠牲となった乗組員もいたという重い現実がある。このことが制作者の側でも十分意識されていたことは、制作者のひとりの田中友幸がつぎのように語っていることから明らかである。「核兵器は力の究極だ。その核実験から生まれた鬼っ子は核兵器よりも強く、圧倒的な力で人間の作り出した文明を破壊してまわる——」。そして田中は語を継いでこう記す、「かくしてできた映画『ゴジラ』……」（田中友幸「ゴジラの栄光」、冠木新市企画・構成『ゴジラ映画40年史 ゴジラ・デイズ』所収、22 頁、集英社、1993 年）。

この映画に対する国民生活への視点から、さらにもうひとつ、忘れられない場面がある。それは、公の職務に身命を賭した人びと、言い換えれば、国民の生活を守るべく己の職務に専心した人びとの描写である。映画では、前述のとおり、ゴジラに立ち向かう戦闘機や戦車や戦闘員の姿が描かれていたが、時間にしてほんの数十秒という単位で映画の中に登場する人びともいた。ここでは特に、非戦闘員たるテレビ局のふたつの実況中継班を代表例として挙げておきたい。初めに登場する中継班の放送局員は、我が国を『ゴジラ』制作の直前まで占領していた G H Q（連合国軍総司令部）のパロディと分かる腕章——「NHK」ならぬ「G H K」——を付けた姿で画面に現れる^{注8)}。そしてこの放送局員は、ゴジラが首都で暴威を振るう様を果敢に実況中継するのである。画面上の第一声は「信じられません、まったく信じられません」であり、ゴ

ジラが都心に向かう様を克明に国民に伝える。このクルーの行く末は映画では描かれていないが、もうひと組のテレビ塔の展望台にいる実況中継班は、眼前に迫るゴジラの姿を実況放送しつつ、ゴジラによって中継拠点のテレビ塔が襲われる寸前に放送局員は、「いよいよ最後。皆さん、さようなら、さようなら」とマイクに向かって絶叫し、テレビ塔の倒壊と共に姿を消してしまうのである。たとえ映画という非現実の世界ではあっても、この放送局員の職責をまっとうする最後の姿には観る者の心を打つものがある^{注9)}。

最後にもう一点指摘しておきたいのは、『ゴジラ』における科学的視点である。

ゴジラの恐竜としての科学的根拠は、国会の委員会の場で古生物学者の山根博士の口を通して語られる。ここでは沖積世とかジュラ紀とかいった古生物世界の専門用語が次々と出て来て、古生物界に疎い筆者にはそれなりの説得力があるように思われるのだが^{注10)}、それよりむしろ、当時の、そして現代の国民生活と『ゴジラ』の接点を如実に物語っているのは、何と言っても映画の中の放射能の描写である。大戸島に派遣された政府調査団の一行は、巨大な足跡に行き当たったとき、団員のひとりがガイガーカウンターを使って地面や周辺を測定する行動に出るのである。そしてその針の動きを見た上で、不安げに調査団を取り巻く周囲の島民に対して、危険だから近寄らないでと警告を発するのである。

この場面はほんの数秒のカットであるが、ガイガーカウンターの使用法と使用目的がこの映画によって広く国民に伝えられたことの意義と教育的効果は、いま以上に大きいものがあつたに違いない。広島と長崎に原爆が落とされたことは当時広く知られていたにせよ、見えざる放射能の存在をどのように測定し確認するかまでは多くの国民にとって知る由もなかったはずである。また、その危険性についても同様である。この映画によって初めて放射能の確認方法が広く国民一般に伝えられたと言ってよいのではないだろうか。記録によれば、当時の『ゴジラ』の観客動員数は「封切館だけでも9610万人」を数えたということからして（朝日新聞、「昭和史再訪 29年11月3日 ゴジラ誕生」、2011年10月29日付）、放射能の危険性やその測定機器について、短期間のうちに『ゴジラ』ほど多くの国民に知らしめたメディアはほかになかったのではないだろうか^{注11)}。

以上、『ゴジラ』を単にS F映画の範疇に収めてお

けない幾つかの理由を、国民生活という観点から挙げてみた。こうした観点に立って見れば、映画『ゴジラ』はS F（サイエンス・フィクション）映画であると共に、語義矛盾を承知であえて言うなら、国民生活のフィクショナルな記録映画という側面をも併せ持つものであるとすることができる。その意味で、『ゴジラ』はS F映画でありながら、（事実と虚構の間に真実があるとする）近松門左衛門の虚実皮膜論を想起させる要素を持ち併せた映画であると言えるかも知れない。そしてまた、後に論じるように、この作品の中に制作者サイドの意図せざる幾つかの寓意をも指摘することができるのであって、こうした『ゴジラ』の多面性や複雑性が、いまなお「ゴジラ論」の絶えない理由のひとつであるように思われる。

Ⅱ. 民俗学の中の『ゴジラ』

映画『ゴジラ』を論じようとする場合、論点の主たる対象となるのは、映像技法に関しては特殊撮影技術や世界初の着ぐるみ撮影などであろう。また、筋書きに関してなら、原水爆の問題や登場人物の設定^{注12)}などであろう。しかしここでは、触れられる機会がさほど多くない大戸島の島民の描き方を取り上げてみたい。この大戸島の場面は、いわばゴジラ登場の前史に相当するものであり、本論における後の論述の前提をなすものでもあるからである。

大戸島に関連した筋書きを以下に抜き出して順に記すと、次のようになる。

- （1）本州東南の大戸島付近を航行していた貨物船が原因不明の「巨大な影」に襲われ、消息を断つ。大戸島に筏で流れ着いた貨物船の乗組員は、島の伝説上の怪獣ゴジラによる遭難であると訴えるが、大戸島に住むその乗組員の肉親を除いては、誰もゴジラ説を信じない。
- （2）大戸島のある古老は、海の異状による不漁がこれ以上続くと、若い娘を生け贄にして海へ流し、ゴジラの餌食にするしかないと語る。
- （3）島の神社で不漁などの「厄払いの神事」が催され、生け贄の儀式を様式化した神楽の舞いが踊られる。
- （4）深夜、嵐のような悪天候に襲われ、島民の家屋が破壊される。
- （5）大戸島村長らによる国会陳情などが功を奏し、政府調査団が島に派遣される。

(6) ゴジラが島民や政府調査団の眼前に登場する。

(3) において描かれた「神事」の営みは、とりわけ自然災害や戦役などの非常事態の際に、前近代の世界においてはごくありふれたことである。このような神事は、現代の内外のTV放送局によって世界各地でビデオ収録され、ドキュメント番組として放送されることも稀ではない。さらに、この「神事」を広義の神頼みとして解釈するならば、21世紀の現代においても神頼みそのものの類いは日常茶飯事と言って過言ではない。その事例を挙げるとなると、多種多様な選択肢のために選び出すこと自体にかえって困難を感じるほどであるが、ここでは、筆者が直に耳にした事例であると共に、我が国の最先端技術の現場における神頼みの典型的な事例と思われるものを挙げてみたい。

筆者は一昨年9月に相模原市の宇宙航空研究開発機構の講演会で、「はやぶさ」プロジェクト・チームの最高責任者である川口淳一郎教授の話を聞く機会があった。川口教授は2時間足らずの講演の中で、プロジェクトの前段階から計画立案、そしてプロジェクトの終了に至る15年以上の歴史を挙げて物語った。この講演内容自体、筆者には興味津々たるものがあったが、中でも特に興味深かったのは次の実話であった。つまり、最先端の科学の結晶ともいべきこのプロジェクトの進行のさなかに、チームの面々が「はやぶさ」の任務遂行と帰還を祈って、我が国の神社——隼神社や飛行神社など——にお参りをしたというのである。語り始めの当初は、場を和ませるための川口教授のジョークの一種かと筆者は思ったのだが、決してそうでないことは、神頼みというこの言葉をご丁寧に教授自身が英語に言い換えたのみならず、その綴りのprayをディスプレイにまで表示して見せたことで明らかになった。実際、プロジェクト・チームの人たちは神頼みを厭わなかったようである。その証拠に川口教授は、「はやぶさ」に少しでも由来があったり関係があったりする、上記のような神社をネットで検索したことを明かし、それらの神社にお参りした際の記念写真まで聴衆に示したのであった。

川口教授はこの点について次のような注釈も加えた。すなわち、チームの各メンバーが「はやぶさ」の任務遂行と帰還のプロジェクトを「全力を尽くして」進めてきたのだから、あとのことは神様にお任せするよりほかなかったのであると。現代人であれば、しかも、時代の最先端をゆく科学者であれば、神頼みの実

効性を信じる者は通常まずいないといってよいであろう。しかし、川口教授のこうした体験談を耳にすれば、最後の最後には神頼みをするしかなかったのだという教授の言葉の端々にある種の説得力が加わったことは否定できず、このエピソードを聞き終えた筆者は、神頼みの実効性云々はともかく、この期に及んで神頼みをせざるを得なかったという事実そのものに、言い換えれば、「はやぶさ」プロジェクトのチームが川口教授を先頭に「隼」神社や「飛行」神社などに参拝したという事実そのものにひときわ深い感銘を覚えたのであった^{注13)}。

さて、映画『ゴジラ』の中では、神頼みの一環である(3)の神楽の舞の神事に加えて、大戸島の前近代性が(6)においても強調されている。たとえばそれは、ゴジラの出現に際して数人の島民が手に手に日本刀を持ってゴジラに相対しようという場面に見られる。銃に関しては、同じ場面で政府調査団のひとりが手にしていたのはライフル銃と思われるが、島民の持つ銃は、火縄銃のようにも日露戦争時代の三八式歩兵銃のようにも見え、いずれにしろ旧式の武器であることは間違いない。島民の中には、武器にでもするのであろうか、長い棒を一本手に持って走り回っていた者も、ひとりやふたりではなかった。

また、大戸島の古老が語る生け贄の伝説についても、『古事記』における弟橘姫の伝説を挙げるまでもなく、自己犠牲や生け贄に関するモチーフは——神頼みと同じく——前近代的な神話世界一般に共通するものといつてよいであろう。こうしたそれぞれの場面の中に、大戸島とその島外の現代社会との著しい対比を看取することができる。大戸島の古老は、先にも記したように、この怪奇現象に伴う不漁が続けば若い女性を生け贄としてゴジラに捧げざるをえないとまで語っている。古老がここで語ったような生け贄の実態やその儀式もまた、古今東西の様々な記録に残されていて枚挙に遑がない。そうした儀式のうち、文化人類学者の石田英一郎が著書の中でひとつの極端な生け贄の実例を挙げ、この儀式の危険な側面が現代ではどのような機会に生じうるかを指摘しているので、以下にこれを取り上げてみたい(石田英一郎「科学の狂信」、『東西抄 日本・西洋・人間』所収、199—200頁、筑摩書房、昭和42年)。

石田は、スペイン征服以前のメキシコに栄えたアステカ族の例を基にして、次のように述べる。アステカ族は、「人間の心臓をつかみだして神々にささげるとい

う、途方もない人身御供の祭礼」をさかんに行っていた。やがて彼らは、生け贄の数が多ければ多いほど「功德も大きい」と信じたため、「祭りの規模はしだいに大きくなり」、記録によれば「一回の儀礼に二万人の人間を殺した」こともあったという。このような「大殺戮」を実行できたのは、アステカ族の「神官階級が軍事の指導者と結合して国政をにぎり、宗教的狂信が国家の権力をささえていたからにほかならない」と石田は断言する。

しかし石田は、「二十世紀の今日」ではこのようなアステカ族の祭礼が再現される「心配はなさそうだ」としつつ、現実における別種の新たな「心配」を述べるのである。石田の言葉をそのまま以下に引用する。「ある国では全人類を一掃するにただけの水爆をもつようになったとか、三十億の人類は十億ドルの経費で全滅できる計算になるとかいった記事が、おおい新聞にでるようになると、どうやら現代の科学の進歩というものにも、アステカ族の狂信となにか似かよったもののあるような気がしてくる」。

石田のこの憂慮は、「さる大国の最高責任の地位にある政治家の談」によって裏付けられることになる。それによると、この大国は「過去三カ年」に三度まで戦争の瀬戸際に追い込まれたが、もしも相手国の譲歩が得られなければ、核兵器の使用による戦闘の可能性を排除しなかったのだという。そして、核戦争の決意を相手国にわからせることによって、「三度とも戦争の危機を切り抜けることができたのだそうだ」。裏を返せば、相手国の指導者たちが、「力の強弱を見通しうるだけ」の「賢明」さを持っていたから「原子力戦」が回避されたということになるのだ、と石田は言う。それゆえに、もし「相手方がたまたま東条（英機首相）程度の頭の持ち主で、それこそ『京は清水の舞台から飛びおりる』気持ちにでもなられたとしたらどうだったろう」と疑問を呈する^{注14)}。そのような場合、行き着く果ては、「平凡で平和な日常生活を願っている私たちも、今ごろはメキシコの神殿で心臓を裂きとられた、二万や三万のいけにえどころの騒ぎではなくなっていたに違いあるまい」。

石田のエッセイは、このように政治家への批判ないし警告の言葉で締めくくられているが、このエッセイの題は、「科学の狂信」である。二頁たらずの文章の中に、宗教的狂信と科学的狂信、それに、あり得べき政治的狂信の三つの狂信が祖上にのせられているのである。ところが、映画『ゴジラ』もまた、ある意味で

これら三つの「狂信」を描いたものと見ることが可能である。すなわち、大戸島の古老の言葉や神楽の神事などによって、前近代的な名残を引く孤島における宗教的狂信の危険性がまず暗示される。次に、ゴジラの登場と数々の暴威は、水爆（実験）の恐怖——すなわち科学的狂信——と常に表裏一体である。ゴジラの去ったあとに残された街の残骸や幾多の犠牲者は、紛れもなく水爆（実験）による悲惨もかくやと思わせるものである。作劇上ここに至れば、政治的判断に政治的狂信が加えられかねない段階まであとほんの一步である。『ハムラビ法典』や『旧約聖書』に現れる「目には目を、歯には歯を」^{注15)}の言葉どおり、「水爆には水爆を」の単純明快な等式論理の出番である。「水爆大怪獣」^{注16)}のゴジラには「水爆」でもって対応することもシナリオの上では可能である。決断は政治の最高首脳に委ねられねばならないはずである。だがしかし、前述のとおり、この映画に「最高責任の地位にある政治家」は登場しない。少なくとも劇進行の表面を追う限り、政治家による最終決断の場面は、対ゴジラ戦の最終局面においても観客の前に示されないままである。というより、映画の制作者は、端から「為政者」に対して信を置いていないかのようである。換言すれば、これは「政治的狂信」の否定である。その象徴的な科白を科学者の芹沢博士が語る。「もしも、いったんこの（ゴジラ殺傷能力を有する技術である）オキシジェン・デストロイヤーを使ったら最後、世界の為政者たちが黙って見ているはずがないんだ。必ず、これを武器として使用するに決まっている。原爆対原爆、水爆対水爆、その上さらにこの新しい恐怖の武器を人類の上に加えることは、科学者、いや一個の人間として許すわけにはいかない」。

こうして、対ゴジラ戦に勝ち抜くための最終決断を下して決死の挙に出たのは、実にこの芹沢博士なのであった。「科学の狂信」そのものは、映画の中では専ら水爆実験に暗示されるのみでしかなかった。映画『ゴジラ』における結末場面は、いかにもSF映画らしく、「宗教的狂信」によるものでもなければ、ましてや「政治的狂信」によるものでもなかった。それはただ、「オキシジェン・デストロイヤー」という芹沢博士の発明した最終兵器による、「科学の狂信」ならぬ科学の勝利によって閉じられたのであった。

Ⅲ. テキスト論による『ゴジラ』解釈の可能性

本章では、映画『ゴジラ』（1954）の解釈をテキスト論の方法に拠りつつ試みると同時に、併せて、筆者のゴジラ像を提示するべく努めたい。

一般に文学作品を研究対象として取り上げる場合、文献的アプローチを始め、歴史主義的、精神分析論的など多種多様なアプローチが存在するが、ここでのテキスト論もそうしたアプローチのひとつに含まれる。もちろん、本論の目的は文学研究の実践ではないため、また、映画の脚本そのものも純粋な意味での文学作品としては扱いにくいという側面があるため、ここではあくまで、『ゴジラ』論の可能性を示しうるひとつの手段としてテキスト論を選択することにする^{注17)}。

テキスト論による『ゴジラ』解釈を本論で試みようとして筆者が決めたのは、本論執筆のための参考文献を渉漁している最中に、一冊の評論集（加藤典洋『さようなら、ゴジラたち』、岩波書店、2010年）と出会ったことによる。加藤典洋のこの評論集を読んで、筆者もまた、『ゴジラ』のテキスト論の試みに加わる意欲を促されたのであった。この評論集については、後に本章でやや詳しく取り上げることとして、以下、テキスト論を通じて、筆者なりに『ゴジラ』を映画の枠組みから一歩脱け出させ、『ゴジラ』解釈の可能性のひとつを本章で提示してみたい。

1. テキスト論によるカフカの『変身』の解釈

まず、テキスト論の手近な具体例として、現在のチェコ共和国の首都プラハで生まれたフランツ・カフカ（1883－1924）の小説『変身』（1915）を取り上げることとする。この小説を選んだのは、テキスト論の方法が文学作品にどのように適用されるかという実例を示すのに適していると思われたためであり、他方、カフカのこの怪異な小説と映画『ゴジラ』の間にわずかながらも類縁関係のあることを指摘するためである（その関係を示唆するキーワードを前以て提示しておくならば、それは、小説の題名ともなっている「変身」である）。

つぎに、『変身』（山下肇記、岩波文庫、1990年。以下、「」内は同訳からの引用）の筋立てをなるべく簡潔に記しておきたい。

カフカは、この物語の書き出しを次のように記している。青年グレゴール・ザムザはある朝、「なにか胸騒ぎのする夢からさめると、ベッドのなかの自分が一匹

のばかでかい毒虫に変わってしまっているのに気がついた」。「毒虫」に変身したグレゴールは、「甲羅のようにかたい背中」を下にしながら寝そべっていて、頭を上げて自分の下腹部に目をやると、「褐色の腹がせりあがっている」のが見える。「たくさん生えている足は」、見るからに「なさけないほどかぼそくて」、グレゴールの「目のまゝに頼りなげにちらついていた」。「どうしたのかな、おれは」とグレゴールは思うのだが、これは「夢ではなかった」。カフカは、グレゴールのこの突然の変身の理由を記していない。グレゴールというひとりの青年が、ある朝に、「一匹のばかでかい毒虫」へと変身したことがこの小説の前提である。

この書き出しから始まる物語が収斂する先はただ一点。それは、グレゴールの死である。と言うよりはむしろ、「毒虫」の死である、といった方が適切である。グレゴールは一匹の「毒虫」として死ぬからである。カフカは、この「毒虫」の死への途上に生じる家庭内の様々な出来事を淡々と書き進めてゆく。こうしたカフカの筆さばきに加えて、読み手に異様な感を与えるのは、「毒虫」に変身したグレゴールが心だけは人並であるという小説上の設定である。ここにグレゴールの心理的精神的葛藤の源がある。しかし、グレゴールの家族——両親と妹——には、「毒虫」の心を窺う術などももちろんない。「毒虫」は声を、意味ある音声を発しないからである。したがって家族は、「毒虫」に変身した一人息子の扱いに悩み苦しむ。父親は嘆く、「あれがわたしの言うことをききわけてくれればなあ」と。

グレゴールは、もはや自宅から一歩も外へ出ることはない。時に室内を這い回り、時に窓から外を眺めるのが精々である。食事はといえば、家族が部屋に運んでくるもの——たとえば「古いくさりかけの野菜」や前日の「夜食の残りの骨」など——を独り「がつがつ」と「むしゃぶり」つくだけである。カフカがグレゴールの心の内奥の言葉——ごく普通の青年の発する言葉——を克明に記せば記すほど、グレゴールと周囲の人間の間にある見えざる壁の厚みが増し、高さが増してゆくのを読み手は感じ取る。

妹は、「毒虫」の日々の世話に疲れ果て、父親の発したあの嘆き以前にすらこう言い切るのである。「こんな化けものみたいなものの前で、私、兄さんの名前を口にする気になれないの…私たち、こいつと手をきろうとしなければだめ。こいつを世話して、我慢に我慢をして、私たちもう人間としてできるかぎりのこと

はやってみたわよ。もう、誰にもうしろ指さされることもありっこないとおもうわ」。しかし、家族からさんざん厄介もの扱いされたこの「毒虫」にも、ついに最期の時が訪れる。致命傷は、あるとき「毒虫」に向かって次々と投げつけられ、その中の一個が背中に命中した「林檎」による「傷」であった。投げつけたのは父親であった。「林檎」のつぶてを浴びつつ、グレゴールは「怖ろしさのあまり立ちすくんだ」。そして思った。「親父のやつ、おれを襲撃しようと決心しやがったんだ」。

「毒虫」の背中の傷は悪化の一途を辿る。窓の外の明けゆく早春の「ほんのり」した光を「毒虫」は感じつつ、「首がひとりでにがくんと落ち」、「鼻孔から最後の息が弱くかすかに流れて」で息絶える。ザムザ家の「手伝い婆さん」によって発見された「毒虫」の「屍体」を目の前にして、家族は思い思いの言葉を口にす。まず、「毒虫」の前にしゃがみこんだ母親は「死んだの?」と、「問いただすように婆さんの方を見上げた」。次に、致命傷を負わせた父親は、「これでわしらも神さまにお礼がいえよ」と言って「十字」を切る。最後に妹はこう言い放つ。「まあ、御覧なさいよ、なんて瘦せたんでしょう。たしかにもうずいぶんと長いことなにも食べてなかったんだもの…」。

両親と妹は、「毒虫」、すなわちグレゴールの亡くなった当日の「今日という日を休養と散策に使うということに一決」し、「それぞれ欠勤届」を「そそくさ」と書き上げると「三人うちそろって家を出て」、「電車によって郊外へ出ていく」のである。そして、「電車を降りるところまできて、娘がまっさきに立ちあがり、若い肉体をのびやかに動かしだすと、夫婦にはそれが、まるで自分たちの新しい夢と善い意図とをたしかに保証してくれるもののようにおもわれた」のであった。

以上がカフカの『変身』のあらましである。

ところで、荒唐無稽とも言えるこのような筋立てのこの物語は、前世紀における実存主義文学の代表的作品として、文学研究の絶好の主題となった（その際のキーワードのひとつは「不条理」である）。『変身』を翻訳した山下肇は、主な作品解釈として、たとえば次の諸点を挙げている（前掲書、107頁）。

この作品を

- ・政治的時事的視点から解釈すれば、（カフカ自身ユダヤ人であったことから）「ユダヤ人問題やファシ

ズムの暴力と考える解説も成立つかもれない」。

- ・社会的経済的視点から解釈すれば、「問題はとにかく現代社会の基礎条件の不条理性に根差しており、（第一次）大戦によって生活の支柱を失った中産階級の不安と絶望がここに反映しているといってもよいだろう」。
- ・文学的思想的な視点から解釈すれば、「カフカが小説に用いる方法は、いきなり超現実的な虫の姿を日常の小市民的現実に対置し、それによって読者に古きリアリズムよりも一層リアルに鮮明に訴える力をもつ、フォークロアと超現実主義の複合体であって、このウルトラモダンな方法の勝利の背後には、第一次大戦後の表現主義や新即物主義の潮流が十分に想像できる」。

ここに挙げた三点が典型的な『変身』の解釈であるとすれば、テキスト論による解釈は、これらとは趣を異にする。

前掲の加藤典洋『さようなら、ゴジラたち』におけるテキスト論（177頁以下）を基に『変身』の解釈を試みれば、おおよそ次のようになろう。

- ・山下肇は先の同じ解説のところで、『変身』という「比喩」は、「ある朝肺患で咯血した病人の死にいたる道と解釈する人があるかもしれない」とも記した。これはもっぱらグレゴールに焦点を当てた解釈の可能性を述べたものである。同書の表紙にある、「自己疎外に苦しむ現代の人間の孤独な姿を形象化した」物語という宣伝文も、文脈上グレゴールの悲劇的人生に着目したものであろう。しかし、視点を周囲の家族にまで及ぼせば、別種の解釈が立ち現れてくる。つまり、グレゴールを「病人」とする解釈に幅をもたせ、物語そのものの骨格を、〈ある朝、ごく普通の青年が突如として脳梗塞の病魔に襲われ、歩行能力をわずかに残すだけで運動機能をほぼ喪失するとともに完全な言語障害を患い、やがては死へと至る道のり〉、とするのである。そして、このような絶望的状况に陥った病人を介護する家族にも、病人本人に劣らぬスポットライトを当てると、彼らが病人自身とは異なる絶望的状况に陥る様子が浮かび出る。家族は病人の介護にはあたるものの、快癒の望みのない病人の日々の介護に疲れ果ててしまうからである。ひとつの家庭の内に生じた二重の現実的絶望である。介護の側の家族は、ついには、病人

を虐待の目に遭わせて病人を死へと至らしめるのである。しかも、彼らには身内を死に至らしめた罪の意識なるものはなく、むしろ、介護の日々からついに解放されたのだという自由の意識と、それに伴う喜びの感情を抱くだけである。

こうした解釈に沿って、この小説の結末をもう一度読み直せば、グレゴールの死につきまとうやるせない暗さと、死の直後の遺族の解放感に感じられる底抜けの明るさの対比はなお一層強烈に現代の読み手に迫ってくる。介護が大きな社会問題となっている21世紀の今日にあっては、こちらの解釈の方が、20世紀の中頃に記された「肺患で咯血した病人の死に至る道」という解釈よりもリアリティに富んでいよう^{注18)}。ただ一点付け加えておくと、「肺患」すなわち結核が依然として不治の病と同義だった当時において、この解釈もまた十分リアリティをもち得ていたことは疑いない。「なぜ、よりによって自分が結核に罹らなくてはいけなかったのか」という病人の発する自問は、当時、不条理性の十分な根拠となり得たからである。

2. テキスト論による『ゴジラ』解釈

以上、カフカの『変身』をモデルにして、作品を原作者の「意図」から切り離し「独立した存在＝テキストとして受けとる作品解説の方法論」（加藤、前掲書、147頁）による解釈の実例を提示してみた。もちろん、カフカはこのような現代の介護の悲劇を予測してこの小説を書いたわけではない。そのため、この解釈は過剰ではないのかという批判は当然出て来よう。こうした予想される批判に対して、たとえばテキスト論者のロラン・バルト（1915—80）は、加藤によれば、「作者の意図など完全に捨象してよい」とする立場に立つのだという。それどころか、「作者の意図」を「捨象」して「作品に向かい合うべきだ」というのが、ロラン・バルトの抱く考え方であるというのである。換言すれば、作家が作品に対して負うべき責任は、ひたすら書かれた事柄に対する結果責任あるのみということである。このようなバルトの文学論に対して、加藤典洋は、前掲書の中では批判的な見解を述べている。つまり、作者が作品の中に敢えてあることを意図的に書かないと想定した場合、作者を無視してこれを単にテキストとして受けとるとすると、テキストに書かれざることは、作者の意図せざることがテキストに「あらしめられていない」こととして実際には読

み取れないのではないかと指摘するのである（前掲書、177頁）。加藤は、このような論理によって「テキスト論の欠陥」を批判するのだが、前掲書の中でゴジラ論を展開するにあたっては、案に相違して、このテキスト論に基づいて『ゴジラ』の解釈を押し進めるのである。それは、テキスト論が「エンターテインメントの作品など」には「有効な場合が多い」という理由による。そして加藤の考えでは、「映画『ゴジラ』第一作は、このケースにあたる」（前掲書、177頁）のである（本論は、ここに記した加藤のテキスト論批判と、エンターテインメント作品へのテキスト論の応用の妥当性について論じる場ではないので、他方また、加藤のテキスト論による『ゴジラ』解釈を吟味し論じる方に重点を置いているので、文学論上の検討や批判については別の機会に譲ることとしたい）。

つぎに、加藤の『さようなら、ゴジラたち』第二章以下で展開される『ゴジラ』論に関して、映画の粗筋部分を除いたゴジラそのものの解釈に的を絞って見ていくと、章の冒頭で加藤は、ゴジラについて問われねばならないことがあるとして、以下のような疑問を発する。

「ゴジラは、なぜ南太平洋の海底深く眠る彼の居場所から、何度も、何度も、日本にだけ、やってくるのか」。

この疑問に対して、加藤の示す理由は単純明快である。ゴジラが「亡霊だから」である。加藤の解釈によれば、テキストにはゴジラの「意味の多元性をささえる基体的な意味像」^{注19)}があって、それは「ゴジラが第二次世界大戦の日本における戦争の死者」＝「亡霊」であり、「より具体的には戦場に行ってそこで死んだ死者たちの相同物（体現物）にあたっている可能性を示唆している」というのである。ゴジラ＝亡霊の根拠のひとつとして加藤が挙げるのは、亡霊のフランス語「revenant」である。加藤はこの単語が「再来してくる者」という原義を持つことを示し、この原義に立脚するならば、「思いを果たせずに死んだ霊は、亡霊となる」ために、「天国」には行けずにこの世を彷徨い、「機会があれば…自分が生きていたときに住んでいた場所に」戻ってくるのだと考える。ゆえにこそ亡霊は「再来者」なのである。さらに加藤は言を継いで、『ゴジラ』の第一作が日本人に強く訴えた理由は、ゴジラが「戦争の死者の多義性」を「このうえなく見事に体現しているから」（前掲書、149頁）という点にあるとしている。

兵士の亡霊に準えられたゴジラに対して加藤が寄せる別の関心事は、ゴジラが行う「1954年のターン」である。映画製作年の1954年にちなむこの「ターン」の場面を大雑把に跡づけておくと、ゴジラは夜の品川沖から上陸し、暴威を振るいながら田町から銀座へと進み、銀座4丁目角の服部時計店の時計塔を破壊し、数寄屋橋から日比谷交差点を経て国会議事堂へと向かうのである。ゴジラはこの国会議事堂をも破壊した後、ここで突如「ターン」をして海へと帰っていく。

加藤はこの「ターン」に着目し、かつてこの「ターン」に言及したふたりの見解を紹介している。ひとりには評論家の川本三郎であり、もうひとり、民俗学者の赤坂憲雄である。以下、加藤による両説の要約を抜き書きする（前掲書、154頁）。

まず、川本説は次のとおりである。

- ・ゴジラはおそらく「戦争の死者たち」なのだが、そのゴジラですら「皇居を踏みつづすことはできなかった」。それほどまでに「天皇制の呪縛」は「日本の国土の一木一草に及んでいる」のである。

一方の赤坂説では、このようである。

- ・「戦争の死者たるゴジラは、天皇に会いに来たのだが、皇居にはもう自分たちを戦場へと行かした統帥権者で現人神」の天皇はいない。天皇は「人間宣言」してしまっていて、「いまや新しい神たるアメリカ」に従属する存在であり、ゴジラは天皇が亡霊たる「自分たちを見捨て」たのだと知り、海へ帰っていったのだ^{注20}。

加藤はこれらふたつの説のうち、「最初の言及者」である川本に「敬意」を表しつつも、解釈そのものは「赤坂説を採りたい」とする。そのうえで加藤は、ゴジラは、「神」たる「天皇」が不在の日本に現れた「戦後の日本人の心の原郷の位置を指示している」と記す。ゴジラの再来は、このことを明らかにするためにこそあったのであり、兵士の亡霊たるゴジラの「苦しみ」の深さは、「その呪力とともに」すでに「天皇のそれを越えて」いるのであり、「ゴジラの呪力」はもはや「天皇の威力」と交替するべきなのだと述べる。

以上の諸点によって、加藤の論じる『ゴジラ』について基本的な部分は確認できたと思われる。こうしたことから、加藤にとってのゴジラ論は、実は姿を変えた天皇論であると言ってもよいのである。天皇は、加藤にとっては戦後確立された価値観としての「平和と民主主義」の対極に位置する存在である。戦後のこ

のような価値観の転換によって、天皇は「新しい神」である「アメリカ」に従う戦後日本の象徴的存在となり、もはや、戦前の「呪縛力の根源」を失ってしまったのだと加藤は見做す。

ところが、ここから生じて来る問題がある。加藤からすれば、いわば不可侵性から象徴性へと変貌した天皇の性格を始めとして、日本の旧来の国柄そのものが敗戦を境に激変してしまったために、「亡霊」の行き場もなくなってしまったのではないかというのである。確かに、映画から離れて現実の日本の戦後を見つめ直せば、GHQ（連合国軍総司令部）主導の政治制度の変革や文教制度の改革など、広範多岐にわたる民主化政策によって、戦後の日本が戦前とは名実共に掛け離れた国になったことは事実である。そして、国民が官民挙げて戦災からの復興に努めた結果、GHQの占領期を経たのち、やがて経済の高度成長への助走を始めようとしていたのも事実であり、さらに付け加えれば、まさにその時期に『ゴジラ』が国民の前に現れたことも事実であった。

こうした世情の激変の中で、それではあの大戦の戦死者をどのように遇したらよいのかという問題が浮上してくる。この問題に早くから心を砕いていた人の中に、民俗学者の柳田國男（1875－1962）がいる。柳田は早くも大戦の末期に、戦後の世の人心の混乱を憂えて、戦死者の慰霊の方法に関する著述（『先祖の話』）をものしていたが、加藤によれば、敗戦時に23歳の青年であった思想史家の橋川文三（1922－1983）もまたそのひとりだったという。橋川文三は、「（天皇の玉音放送が）終わったとき、…いわれの無い涙が流れた。そのとき思ったこと」のひとつは、「死んだ仲間たちと生きている私との関係はこれからどうなるのだろうか」ということであった（前掲書、181頁）。

しかし、日本国憲法のもとに社会制度や法体系などが根本的に変化した戦後であっても、死生観それ自体については、基本的には戦前と変わらぬ死生観がほとんどそのまま引き継がれたといってもよいであろう。その具体的な現れのひとつが日本遺族会の創設^{注21}である。日本遺族会は、当然ながら「尊い祖国の防衛のための犠牲者」である英霊としての戦死者に向き合ったのだが、加藤にとっては、戦死者をこうした言葉で形容することは先の大戦ないし戦死者の「両義性」の半面を無視しているとしか考えられないのである。戦死者と向き合うには「両義性の感覚」を持たねばならな

いという加藤にとって、先の大戦がたとえ「白人支配からアジアを解放するという大義名分」があったにせよ、それは「いまの目から見るなら明らかに恥ずべき側面を多くもつ悪しき侵略戦争であった」のである。加藤が「両義性の感覚をもつこと」の重要性を説く際に、その軸足が「悪しき侵略戦争」の方に置かれていることは言うまでもない。したがって、加藤は戦死者の保守的な解釈による英霊を「侵略戦争の先兵」でもあるとして、このような「両義性」のもとに英霊を相対化するのである。

戦争や戦死者についての「両義性」を主張する以上は、戦死者はおのずと「行き場のないもの」とならざるを得ない。「両義性」の主張が強まれば強まるほど、戦死者が行き場を失うのは当然である。なぜなら、戦死者は、かつては「尊い祖国の防衛のための犠牲者」として、安んじて靖国神社という最後の「行き場」に赴くことができたのに、「悪しき侵略戦争の先兵」というもうひとつの負の役割を担わされては、英霊といえども靖国神社の前で歩みを止めざるを得ないであろうからである。

加藤はこのような状況に対応した解決案のひとつを、『ゴジラ』の未来のシナリオとして提示する。この解決案は、あたかも映画の結末部分でゴジラを死に導いた最終兵器「オキシジェン・デストロイヤー」のごとき破壊力を秘めるものである。すなわちそれは、ゴジラ自身による靖国神社の「破壊」であった（前掲書、173頁）。

この靖国神社の破壊案は、『ゴジラ』の次回作が計画され、かつまた加藤がその「脚本制作陣の一角」に加えられたらという前提で発せられた解決案には違いないが、映画が現実を映すということが往々にしてあるように、逆に現実が映画を映すということも——たとえば、映画から現実を経て再び映画へという道筋を辿るとしても——時にはありえよう。この次回作『ゴジラ』の場合の現実とは何か。それは、近年の国会でも幾度となく議論の対象となった国立追悼施設の設置案である。将来、国立追悼施設の設置が実現したときには、天皇を始め政財官の人びとや一般国民はもちろんのこと、外国の元首や要人も何のわだかまりなくこの施設に詣でることができるというのが、新施設設置の主たる理由であろう^{注22)}。となれば、従来の追悼施設としての靖国神社の役割が相対的に低下するのは避けられず、長期的な視点に立つと、靖国神社の担うべき役割が次第に曖昧化され、やがては参拝者の減少から

衰退の一途を辿るという悲観的な見方も出て来よう。要するに、国立追悼施設の建設は、緩慢な靖国神社の「破壊」に通じると言っても過言ではないのである。

靖国神社の破壊を最終場面とする「映画」が先に完成するか、あるいは、「国立追悼施設」の建設が先になるかは、現時点では不明であるが（恐らく現実的に考えた場合、これまでの政治日程上の動向などからすると、可能性としては「国立追悼施設」の方が「映画」よりも先んじやすいと見るのがのが普通の見方ではないか）、両者に共通するのが靖国神社の最終的な「破壊」であることは確かであろう。

東日本大震災と福島第一原発大事故の記憶が生々しい昨年6月に、筆者は、本学のメディア文化コース所属の2年生から4年生までの3クラスの学生諸君と共に、各々授業の一環として映画『ゴジラ』の成立史や製作実態を調べたり、二度の『ゴジラ』勉強会を実施したりした上で、作品の分析的解釈を試みた。その際に筆者は、あの「オキシジェン・デストロイヤー」を、ギリシア悲劇における「デウス・エクス・マキーナ」（機械仕掛けの神）に準え、劇の展開上の難題を突如解決する手段としての両者の相似点を学生諸君に説明した。

もしも、加藤の描いた前述のシナリオどおりにゴジラによる靖国神社の「破壊」が『ゴジラ』の次回作において実現したならば、筆者はそのとき、未来の学生諸君を前にしてこのように語るに違いない。このたびの作品では、ゴジラそのものが「デウス・エクス・マキーナ」へと「変身」したのである。

エピローグ

前章では、加藤典洋による未来の『ゴジラ』のシナリオ案に焦点を当てて論じるべく努めた。筆者としては、このシナリオ案に対して、精神的・思想的観点から若干の異論を差し挟みたいところがあるが、映画のスペクタクル的効果の発揮という面からのみ考えれば、ゴジラによる靖国神社破壊というシナリオ案の結末が、意外な筋書きと相俟って迫力満点のシーンを生み出すこととなろう。それに、現実靖国神社に反対する立場の人びとの中には、映画の中の出来事とはいえ、これによって溜飲を下げる人もあろうし、さらには、反対運動そのものにも少なからずプラスのインパクトを与えることも考えられる。

他方、靖国神社の支持者側は、この荒唐無稽なシー

ンに慨嘆の声を上げるであろうことは想像に難くない。しかしながら、これを契機として、靖国神社を支える人びとが——加藤の言う意味とは異なる意味で——英霊に対して、「あらためてしっかり向き合う」という意識を高めるのではないかという、映画の製作意図とは逆の現象が起きることも想像できる。したがって、加藤のシナリオ案による新作は、両サイドにとって互いに功罪相半ばする映画となる可能性があるが、以上に述べたことはまた、期せずして、現代における靖国神社の置かれた立場をある意味で反映するものと言うことでできよう。

ところで、加藤のシナリオ案に刺激されて、筆者はこの案に追加提案したいと思うことがある。

加藤は前掲書『さようなら、ゴジラたち』の中で、「ゴジラのし残していることがある」と前置きし、これを行わずばゴジラは「成仏」できずと言う(173頁)。それが、前章の末尾で触れた靖国神社の「破壊」であった。加藤のゴジラ論を締めくくっている、「祭神」化ならぬ「成仏」化のこのシナリオ案を以下にそのまま引用する。

「ゴジラが再びやってくる。品川沖から東京に上陸する。夜であってほしい。そのゴジラはこれまで行かなかったところに行く。

行き先は、靖国神社。

ゴジラは、靖国神社を破壊する」(173頁)。

つぎに、筆者の追加提案を示すが、この提案の前に一言書き添えておきたいことがある。加藤は前掲書において、戦死者たちと真正面から向き合うことを主張していたが、筆者は、靖国神社の「破壊」がある種の慰霊の意味をもち得て、「成仏」することができる亡霊もいると認めるものである。しかし、それだけではやはり十分な慰霊たり得ないとも考える。つまり、このような「破壊」だけでは戦死者たちと真正面からまだ向き合っているとは言えないのではないかと考え、筆者はこの点を考慮して、1954年のゴジラが果たし得なかったことをシナリオ化して以下に提示するべく試みたい。

筆者は、前述のとおり、加藤のシナリオ案による『ゴジラ』の終結をほぼそのまま引き継ぐことができる。ただその際に、「夜」の日付については特定してしまうことを提案したい。その日付は、靖国神社の創建日に当たる6月29日である。それも、「旧暦」

による6月29日でなければならない。また、「夜」は「夜」でも、当日午前の「深夜」を是非とも提案したい(1954年のゴジラは、銀座四丁目角の服部時計店の時計塔を「午後11時」に襲撃している。撮影カメラはあのビルの時計の針が「午後11時」を指していたのをはっきり捉えており、念の入ったことに、映画制作者は同時刻のチャイムの音も破壊の轟音の中ではっきり鳴り響かせていた)。できることなら、旧暦6月29日の「午前0時1分過ぎ」に、ゴジラが品川沖に上陸するか、それとも、靖国神社の破壊の挙に出るかというのが望ましい。

その理由を記す。

まず、靖国神社本来の創建日である旧暦6月29日を破壊決行日とするよう提案したのは、この日を新暦に直すと、昭和20年には原爆投下日でもある「8月6日」にあたっていたからである^{注23)}。一方、「午前0時1分過ぎ」というのは、極東国際軍事裁判(いわゆる東京裁判)で「A級戦犯」とされた「被告」7名の処刑(「絞首刑」=“Death by hanging!”^{注24)})が、昭和23年12月23日の「午前0時1分過ぎ」から、拘置先の巣鴨プリズンで「三十五分」をかけて執行されたからである(昭和23年12月23日付朝日新聞^{注25)})。戦後に「A級戦犯」も合祀された靖国神社を兵士たちの亡霊たるゴジラが襲ってこれを破壊すれば、映画の中の出来事とはいえ、「A級戦犯」にとっては、いわば二度目の死刑執行となるに等しい。また、見る人が見れば、この「死刑執行」は衆人環視の中の疑似公開処刑ではないかとの思いを抱くかも知れない。さらに、兵士たちの中には、「A級戦犯」を含めた軍の上層部に対して積年の怨恨を抱いていた者もあったであろうから、ゴジラの姿に身をやつた兵士たちの亡霊は、ここに本懐を遂げたとして——加藤案のような立場に立つ映画制作者が望むように——ようやく「成仏」できる者もいるに相違ない。そうした「成仏」を保証しているのは、もしかして、おのれの死に対する不条理性の解消なのかも知れず、もしもそうであるなら、兵士たちのこの不条理性は、父親から林檎のつぶてを浴びて致命傷を負った、あのグレゴール・ザムザ(カフカの『変身』の主人公)のものと、どこかしら通底しているように筆者には思われてならない。

以上が加藤のシナリオ案に対する筆者の変更提案であるが、しかし、これとは別に、もしも加藤案を受け継ぎながら筆者独自のシナリオを追加提案することが許されるとしたら、結末場面をふたつのシナリオで

描く新たな版の製作を提案したい。これは、次回作の『ゴジラ』の結末場面だけを、あらかじめ加藤案による版と筆者案の版に分けて撮影・制作し、DVDないしBDの中にふたつの版をメニュー選択できるようなセットするというものである。

加藤のシナリオ案は、最終的に靖国神社を破壊するというで結末を迎えるのだが、筆者の用意する結末案を記せば以下になる。

〈筆者案〉

ゴジラが再びやってくる。品川沖から東京に上陸する。夜であってほしい。それも、旧暦の2XXX年6月29日（新暦の8月6日にあたる日を想定）である。上陸を果たしたゴジラは、これまで行かなかったところに行く。

行き先は、靖国神社。

兵士の亡霊たるゴジラは、次第に靖国神社の大鳥居に近づく。時刻は午前0時1分過ぎであってほしい。いまにもゴジラが大鳥居に手をかけようとするちょうどそのとき、神社の奥から歌声が響いて来る。ゴジラは、虚をつかれたかの如く大鳥居の手前で動きを止める。ゴジラは金縛り状態に陥る。神社からの歌声は次第に大きくなる。歌っているのは人ではない。すでに神社周辺の人びとは、当局の退避命令を受けて避難しているからである。歌声は神社に祀られた祭神たちのものであった。霊の声は霊の耳に届くのである（ゆえに通常であれば、これは人の耳には聞こえないはずなのだが、映画の編集段階で効果音処理を施し、ゴジラの耳に届くのと同じ歌声が聞こえるように巧みに観客の耳に響かせる）。

竹山道雄原作の映画『ビルマの豎琴』（1956年初映画化、監督：市川崑、出演：安井昌二ほか）では、帰国間際の兵士たちは「あふげば尊し」を歌う傍ら、すでにビルマ僧に「変身」していた主人公の水島上等兵に向かって、「水島、一緒に帰ろう」と叫んだのだが、これに対して、兵士たちの亡霊たるゴジラに向かって、「ゴジラよ、ここで一緒に帰ろう」と神社の中から呼びかける霊はいない。しかしそれでも、歌声が徐々に大きくなるにつれて、旋律が、そして歌詩が、巨大なゴジラの耳にもしかと届くようになる。それは、旋律も歌詩もゴジラには馴染みのあるものである。

海行かば 水漬く屍

山行かば 草生す屍

大君の 辺にこそ死なめ

顧みはせじ^{注26)}

歌われていたのは、大伴家持作詞・信時潔作曲の「海ゆかば」であった。

あの荘重な歌のしらべに包まれて、ゴジラは大鳥居の前に立ち尽くしたままである。神社一帯は、それまでの破壊の轟音が嘘のようにしんと静まり返っている。ゴジラは半ばくずおれるように地面に両膝をつく。周囲にこれを目撃する者がいたなら、ゴジラが神社の前で祈るためにひざまづいたかのように見えただろう。歌声の響きのやまぬ中をゴジラはおもむろに立ち上がり、神社の前で再び「ターン」を、「2XXX年のターン」をして、南の海への帰還の道を辿るのである。…

ここで歌われるのが「海ゆかば」であるのには理由がある。以下にそれを記す。

それはまず、この「海ゆかば」が第二の国歌といわれる程に戦中の国民一般に愛唱されていたからである。愛唱歌たる所以の一端を記すなら、昭和18年の早稲田大学安倍球場における「最後の早慶戦」の試合終了後に、慶應義塾大学側の応援席から自然発生的に「海ゆかば！」の声が上がり、グラウンドの選手と応援席の観衆が一体となって「海ゆかば」を歌ったことを挙げておきたい（筆者はこのことを、慶應義塾大学の出場選手のおひとりであった河内卓司氏〔遊撃手〕から伺ったのだが、試合終了後に「海行かば」が歌われたことは広く知られた事実であるため、「慶應義塾大学側の応援席から」という点について検証の余地があるとはいえ、貴重な証言のひとつとしてここに記した次第である〔この証言は、高橋龍太郎（注21参照）が創設して、河内氏もその一員であったプロ野球団「高橋ユニオンズ」のOB会（平成22年10月）における、「海行かば」斉唱の契機に関する筆者の質問に対しての氏のお答えである〕）。

そしてまた、『万葉集』所収のこの大伴家持の「歌」と靖国神社の結び付きを辿っていけば、それは、靖国神社の創建日にまで溯れるからである。すなわち、この「歌」の一部が靖国神社の創建日のふたつの祝詞の中に引用されているのである。そのひとつは、明治2年6月29日（旧暦）の「招魂社（現靖国神社）の創建の際の祝詞」であり（「海行かば水付く屍、山行かば草むす屍…」）、もうひとつは、その二日後にあたる

7月1日の「右大臣三條實美参拝の際の奉読祝詞」
 「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大王の上
 にこそ死なめ…」である（以上、靖国神社編集並び
 に発行『靖国神社百年史 事歴年表』、34頁以下、昭
 和62年）。したがって筆者は、先のシナリオ案作成当
 初、靖国神社の場面には「大君（天皇）の御拝し給ふ
 榮光の宮」と歌われる「靖国神社の歌」^{注27）}をここに
 響かせようと考えたのだが、靖国神社の歴史を調べて
 いったときに前記二つの「祝詞」の存在を知り、もし
 も結末シーンで響かせることができるとしたら、同じ
 「歌」ではあっても、ここは「海ゆかば」の方が「靖
 国神社の歌」よりも一層ふさわしいのではないかと考
 えたのである。

ちなみに、「海ゆかば」は、日本放送協会の委嘱に
 よって信時潔（1887－1965）が作曲し、「昭和十二
 年十月」に初めて放送されたものである。大東亜戦争
 に突入して我が国の戦局日増しに傾く中、昭和19年頃
 のラジオのニュースでは、「大本営発表」という項目
 の中で、大本営陸海軍部は「日本軍の勝利を伝える場
 合」には「軍艦行進曲」を流したのだという（久世光
 彦「海ゆかば」、新保裕司編、前掲書、67頁）。これに
 対して、「日本軍の玉砕の報道に際して」は、「海ゆか
 ば」の方を流したのだという（桶谷秀昭「深沈たる日
 本鎮魂曲『海ゆかば』」、新保裕司編、前掲書、18頁以
 下）。それゆえ、「海ゆかば」と靖国神社の深い結び付
 きを考えれば、この歌が、鎮魂のしらべとして兵士た
 ちの亡霊たるゴジラの耳に響くのはごく自然のことと
 言うてよいであろう。

さらに、「海ゆかば」の『万葉集』の時代から下って
 『古今和歌集』（905）へと目を移せば、「序」の中で
 紀貫之は、「力をも入れずして天地を動かすのみなら
 ず、「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」るのも、
 ほかならぬ「歌」であると記した。ここに言う「鬼
 神」とは、何よりも「死者の靈魂」のことと解したい
 （『古今和歌集』窪田章一郎＝校注、角川文庫、昭
 和63年、7頁）。貫之はこれに続けて、「猛き武士（も
 ののふ）の心をも慰むる」のも同じく「歌」であると
 記した。このように書き記した貫之の脳裡にあったの
 は、言うまでもなく、先人の遺した『万葉集』の世界
 であったのであり、大伴家持ももちろんその世界にお
 いて重きをなした歌人であった。

我が国では、このように『古今和歌集』の時代から
 ですら、「歌」には「鬼神」＝「死者の靈魂」をも感
 激させる力があるとされていたのである。そして、近

代国家として初めての対外戦争である日清日露の戦役
 以来、旧日本軍の兵士が「猛き武士」として戦地に向
 かい、勇猛果敢に戦ったことは、内外の数多の戦記の
 記すところである。我が国の兵士の戦いぶり一般が戦
 士としての道に外れたものと敵方に広く認識されてい
 たのであれば、戦い済んだ後の、敵方からの「軍刀」
 や「日の丸」の返還などといった、先の注に記したよ
 うな幾多の逸話は生まれなかったに違いない（注21参
 照）。

これに加えて、ここにもうひとつ書き添えておき
 たいことがある。それは、我が国の鈴木貫太郎首相
 （1867－1948）が先の大戦末期に、交戦国のひとつ
 であるアメリカ合衆国のF・D・ルーズヴェルト大統
 領（1882－1945）の死去に際して弔意を表明したと
 いう事実である（以下、小堀桂一郎『宰相 鈴木貫太
 郎』〔文藝春秋社、昭和58年〕による）。

ルーズヴェルト大統領が脳溢血のために死去したの
 は、1945年4月12日のことであつた。この報を受け
 て、鈴木首相は、「アメリカ国民に対する深い哀悼の
 意を表明した」というのである（4月15日付『ワシ
 ントン・ポスト』のUPによる記事。前掲書、35頁）。
 同日付のニューヨーク・タイムズにも同様の記事が掲
 載されているので、小堀氏の前掲書にある同紙の複写
 紙面から、見出しの部分抜き書きしておきたい（小
 堀、前掲書、59－60頁）：「日本首相、弔意を表明／
 鈴木、故大統領の指導力が〈優位〉の原因と語る」
 （“Japanese Premier Voices ‘Sympathy’/ Suzuki Says
 Dead President's Leadership Was Responsible For
 ‘Advantageous Position’”）。

小堀氏の前掲書には、鈴木首相の弔意表明に対する
 アメリカの報道機関の反応や永世中立国スイスにおけ
 る新聞報道についても触れられているが、ここでは、
 当時、ドイツ向けの国際放送でたびたび時局スピー
 チをしていたアメリカ在住のドイツ人亡命作家トー
 マス・マン（1875－1955）の反応を記しておきたい
 （小堀氏の前掲書にも、このマンのスピーチが一部引
 用されている。73－74頁）。マンは、1945年4月19
 日の放送でつぎのように語り始める。「ドイツの聴取
 者諸君！偉大な人物が亡くなりました。政治家にして
 英雄なる人、国民を社会的教養の新しい段階にのぼら
 せ、国際社会と平和機構への奉仕に力をつくすよう国
 民を成熟させ、みずからそのために生命と闘争を捧げ
 た人間の友、人類の指導者、フランクリン・ディラ
 ノ・ローズヴェルトが亡くなりました」。

つぎにマンは、アメリカの同盟国であるイギリスおよびソ連の両国首脳（チャーチル首相とスターリン首相）がルーズヴェルト大統領の死去を深く惜しんだのは驚くにあたらないことであるとし、続けて以下のように訴えるのである。「しかしドイツ人諸君、日本帝国の総理大臣が故人を偉大な指導者と呼び、アメリカ国民にこの喪失に対する日本国の哀悼の意を表明したことに対して、諸君は何と言いますか？／これは呆れるばかりのことではありませんか。（中略）諸君には理解できないことにちがいないでしょう。日本はアメリカと生死をかけた戦争をしています。野心的な封建君主のグループが、日本をこの戦争に導いたのです。しかしこの階層の危険な支配が、道徳的な破壊と麻痺を醸成し、ちょうど私たちのあわれなドイツで民族社会主義がやってのけることができたと同じように、国を零落させたのだなどというのは、はなはだしい見当ちがいです。あの東方の国には、騎士道精神と人間の品位に対する感覚が、死と偉大性に対する感覚が、まだ存在するのです。これが違う点です」（伊藤利男訳、『トーマス・マン全集 X 評論 2』所収、「ドイツの聴取者諸君（抄）」、653-4頁、新潮社、1972年。引用文中の「民族社会主義」とは、国家社会主義すなわちナチスのことであり、その頭目は、言うまでもなく、この半月後にベルリンで自殺したとされるアドルフ・ヒトラー首相 [1885-1945] である）。

マンは、敵国アメリカの最高指導者の死去に際して弔意を表明した元海軍大將にして現首相の鈴木貫太郎の中に、「騎士道精神と人間の品位に対する感覚」がしかと息づいているのを見て、自身もまた呆然としたに違いない。同じ日のスピーチの後段で、ヒトラーらドイツの首脳がルーズヴェルトの死に悪罵の限りを尽くしていたことをマンが口を極めて非難したことが、その何よりの証明であろう。おそらくマンは、鈴木首相のアメリカ国民に語った哀悼の言葉に武人としての礼節を見たはずである。武人の勇猛果敢が「騎士道精神」（ないし武士道精神）の属性のひとつであるように、敵に対する礼節もまたそのひとつに数え入れられる。日本風に言えば、武人としての道は、敵対者と互いに生死を賭けて敢然と戦う以上、その敵対者の死をも悼むという「人間の品位に対する感覚」にも間違いなく通じているのである^{注28)}。

以上のことから、筆者のシナリオ案にある靖国神社のあの最後のシーンに「海ゆかば」を響かせることにより、かつての「猛き武士」にして「鬼神」ともなっ

たゴジラを迎えかつ送るというのは、決して故なしとしないのである。加藤の評論集の題名は、前記のとおり『さようなら、ゴジラたち』であった。もしも筆者のシナリオ案を基に次回作の『ゴジラ』に副題を付けるとすれば、「ゴジラたちよ、とわに安らかに」としたい。南の海へ帰還したゴジラが海の底で再び眠りにつくのであれば、残された者にできることは——1954年作の『ゴジラ』の最終場面で、ゴジラ（と芹沢博士）の死を見届けた船上の人びと一同が両者の霊に黙礼を捧げた以上に——、「みたまよ、安かれ」と、言葉の真の意味における慰霊の祈りを捧げるよりほかはないと思うからである。

《補遺》

（1）「昭和20年8月6日」の二義性について

本文に記したとおり、靖国神社の創立記念日は旧暦の6月29日であり、新暦の現在でも、この日付が靖国神社の創立記念日である。しかし、この日付を昭和20年当時の新暦に直したとしたならば、旧暦の6月29日は、新暦の8月6日にあたるのであり、これは、日付のみについて見れば、言うまでもなく広島への原爆投下日である。アメリカ軍は、靖国神社の旧暦の創立記念日を意識して原爆投下の挙に及んだのであろうか。それとも、これは日付上の単なる偶然の一致なのであろうか。本論におけるテキスト論をここでも応用することが許されるとしたら、「作者」（＝アメリカ）の「意図」がどこにあったのかを詮索することよりも、むしろ、「作品」（＝原爆）に「しっかりと正面から向き合う」ことの方が肝要なのである。したがって、後世に生きる者にとって重要なのは、「8月6日」が原爆投下によって二重の意味で重い日付とされたという事実の方であらねばならない、と言ってよいであろう。

さらに、ここにもうひとつの事実を付け加えれば、靖国神社に対するアメリカの基本的な考え方が、少なくとも戦後のある時期までは首尾一貫していたことに思い至るのであり、アメリカが靖国神社に対して並々ならぬ関心を寄せていたことが分かるのである。そのもうひとつの事実とは、アメリカ国務省所管の「戦後計画委員会（PWC）」による靖国神社の「閉鎖」案作成である（中村直文・NHK取材班『靖国』、20頁以下、NHK出版、2007年）。この靖国神社閉鎖案は、PWCの下部機関（「部局間極東地域委員会」）が作成した対日政策案に含まれるものであり、このうち

の「PWC-115 日本・信仰の自由」と題する文書の中で「結論」として打ち出されたものである。ただし、PWCは靖国神社を閉鎖できると「明快」に「結論」づけながらも、その「閉鎖のもたらす弊害」にも配慮して、「国家とのあらゆる結びつきを断った上での」靖国神社の「存続」という、いわば両論併記の「慎重かつ穏健な方向性」を示したのだと『靖国』は記している。しかし、靖国神社の存廃問題は戦後に持ち越され、GHQ（連合国軍総司令部）内部で「再燃することになる」（『靖国』、26頁）。ここで言う「再燃」とは、具体的には、国家神道の廃止論議から神道指令の発令に至る経緯の中で、靖国神社の問題が俎上に上ったことを意味するが、その詳細については『靖国』に譲ることとして、ここでは、その間に生まれたひとつの挿話を取り上げておきたい。

GHQは、大日本帝国解体の一環として、靖国神社の廃止案（「靖国神社焼き打ち計画」）を作成して、これを実施に移すべく準備を整えていた（朝日ソノラマ編集部構成『マッカーサーの涙』、97頁以下、朝日ソノラマ、昭和43年）。したがって、この廃止案が実行に移されていたなら、名実共に、靖国神社の「破壊」の成就となるはずであった。しかしながら、結局この「焼き打ち計画」は、GHQに対する一外国人神父の働きかけによって頓挫することとなる。すなわち、旧上智学院（現上智大学）院長のブルノー・ビッテル神父（1898—1988）は、靖国神社焼き打ち計画に関するGHQからの意見聴取（昭和20年10月中旬）に対して、他の数人の神父と共に意見をまとめ、つぎのような内容の「答申書」をGHQに提出したのである：自然法に基づけば、いかなる国家もその国家のために死んだ人びとに対し「敬意をはらう権利と義務」があるのであって、「靖国神社の焼却、廃止は米軍の占領政策と相容れない犯罪行為である」と（前掲書、118頁以下）。

もちろん、ビッテル神父のこのような行動のみが戦後の靖国神社存続の背景にあったとは考えられないが、少なくとも、靖国神社の「焼き打ち計画」を立案するに至る政治的文化的背景がGHQ側にあったことは否定できず、また、ビッテル神父らの考え方がGHQ側に正しく伝わったのであれば、計画の立案から意見聴取を経て計画の頓挫という一連の流れは首尾一貫していると言わざるをえないのである。しかし、GHQに対するビッテル神父らの働きかけそのものを文書上の「確証」がないとして否定的に考えるのは、前出

の中村直文・NHK取材班による『靖国』である。ところが、「ない」ことを証明するのは「悪魔の証明」と言われるほどに困難をきわめるものである。そのため、今後の調査研究でビッテル神父らの活動の真正性を証す文書が発見されぬとも限らない。このようなことから、現段階では、筆者はビッテル神父の詳細な口述筆記の書を真性の証言として受け取る側に立ちたいと思う。

筆者は念のためにと考え、研究取材の一環として、昨年9月に東京都千代田区のローマ法王庁在日大使館を訪れた。ビッテル神父が終戦直後から「駐日ローマ法王代表・バチカン公使代理」の地位にあり、「マッカーサー司令部（GHQ）を補佐した」（前掲書、12頁）こともあったことから、ビッテル神父に関する当時の何らかの文書が保存されていて、戦後65年が経過した現在、もしかして、バチカン市国の法律に基づく情報公開の対象となるものがあるかも知れないと考えたからである。しかし、大使館職員の見返は、大使館関係の文書類はすべてローマ法王庁に送付することになっていて、大使館には存在しないとのことであった（なお、前掲書『靖国』は、『キリスト教年鑑』[キリスト教新聞社発行]における当時のビッテル神父の経歴に疑義を持たせる点があることを間接的に指摘した上で、このことをビッテル神父らの活動の真正性を否定できる傍証のように捉えているが[114頁]、同書が疑問を呈する該当箇所を筆者が読む限り、別の読み方が可能ではないかと考えるようになった。詳細を省略して要点だけを記せば、本件が靖国神社に関わる問題であること、なおかつ、当該の『キリスト教年鑑』が戦後間もない時期の出版であること、という二重の背景を勘案すれば、当時の『キリスト教年鑑』の編集方針の中にカトリックとプロテスタント両者間のある種の確執があったと考えられ、ビッテル神父の経歴に関する不自然な処理は、そうした確執のひとつの痕跡ではないかと筆者は推測せざるをえないのである）。

最終的に、GHQは、一度は靖国神社を焼き払うという計画を立てはしたものの、被占領国の国民感情への配慮や内外の社会的な反響、それに、GHQの占領政策の円滑な遂行などをも考慮して、靖国神社の存続に決したのであった（この間の経緯については、前掲書『靖国』に詳しい）。

ここで、冒頭に触れておいた日付の問題へ立ち返ってみたい。

我が国に対するアメリカの硬軟両様の「攻撃日」を

列挙すると、主なものはつぎようになる。

- ・陸軍記念日の3月10日（昭和20年）＝東京大空襲の日
- ・海軍記念日の5月27日（昭和20年）前日（26日）の東京空襲（これは、海軍記念日の慶祝行事の妨害行為とも解釈できる。首都東京に対する都合3回の大規模な空襲のうち、二度までもが軍関係の記念日ないしその前日に行なわれたことになる）
- ・天皇誕生日の4月29日（昭和21年）＝この日、極東国際軍事裁判所に国際検察団側から起訴状が提出され、また、巣鴨拘留所に拘禁されている「A級戦犯容疑者」にも同じ起訴状が送達された（小堀桂一郎『さらば、東京裁判史観』、59頁、PHP 研究所、2001年）。
- ・皇太子（今上天皇）誕生日の12月23日（昭和23年）＝「A級戦犯」の処刑日（この処刑も、我が国に対するアメリカの「攻撃」のひとつと見做してよいであろうし、猪瀬直樹によれば、この執行日の決定は、次期天皇である皇太子殿下が即位された暁には天皇誕生日と処刑の日が重なることを計算してのことであったという『ジミーの誕生日』266頁、文藝春秋社、2009年）
- ・明治節（明治天皇誕生日）の11月3日（昭和21年）。この明治節に、GHQ製憲法ないしマッカーサー憲法と揶揄されることもある日本国憲法が公布されたため、半年後の5月3日の日本国憲法施行に伴って大日本帝国憲法は廃止（大日本帝国の消滅）となる。もっとも吉田茂元首相の回想録には、「新憲法の公布式は、十一月三日、當時の明治節の佳き日をトして、貴族院の議場において行われた」とあり、11月3日が明治節という吉日にあたることから、この日が日本国憲法の公布式のために選ばれたということらしい（吉田茂『回想十年第二巻』、49頁、新潮社、昭和32年）。しかし、当時はGHQの占領期間中であって、旧体制下の明治節と新憲法の公布日を重ね合わせることにGHQの関与が皆無であったとは言い切れないように思われる。猪瀬直樹の前掲書によれば、そもそも極東国際軍事法廷の開廷日が昭和21年「5月3日」なのであって、当時「一部の総司令部（GHQ）の幹部を除いては、「この日（開廷日）が新憲法の施行日となることは誰も知らな」かったのである（232頁）。

これら一連の日付の中に「8月6日」を置いて見れば、アメリカがこの日を何らかの意図を持って選択し

たのではないかとの疑いは拭い切れない。他方、ごく常識的に考えた場合、新暦の6月29日が原爆投下日とされなかったのは、この時期が我が国の梅雨の季節であるために、計画当初からこの日は外されていたのではないかと想像できるが、この想像は、資料によると事実とは異なるようである。

たとえば、原爆投下日の決定に至る経過については、鳥居氏『原爆を投下するまで日本を降伏させるな』（草思社、2005年6月）に詳しい。以下、同書から、本論と関係する部分を引用する。

トルーマン大統領とバーンズ國務長官は、原爆投下に至る道筋の中に、『「四つの期日」を記した予定表」を作成した。その期日とは、「七月四日、七月十五日、八月一日、八月八日」であり、それぞれ順に「原爆実験の予定日、(米英ソの) 三国首脳会談の開幕日、原爆の投下準備が整う日、ソ連参戦の日」となる（252頁）。しかし、「予定」は予定であって、四つの日付のうちの三つに変更があった。すなわち、実際の原爆実験日は「七月十六日」となり、三国首脳会談は「七月十七日」に開催され、ソ連参戦日は「八月十五日となる」。ただ、原爆投下準備完了日の「八月一日」だけは「まったく変わりがな」く、「投下は八月三日以降」とされた。

鳥居氏によれば、原爆投下に関する綿密な計画の目的はただひとつ、それは、「日本の都市に原爆を落とすこと」であったという。鳥居氏はつぎのように記している（前掲書、258頁）。トルーマン大統領とバーンズ國務長官にとって、「なによりも重要なことは、日本の都市に原爆を落とすことなのであり、(中略) 二人がずっと考えてきたことは、原爆を日本の都市上空で爆発させるまで、決して日本を降伏させないということでしかない」。つまり、アメリカ本土における原爆実験は7月4日に予定されていたのであって、6月29日の原爆投下の可能性は最初から排除されていたにしても、実際の原爆投下日は「八月三日以降」と設定されたことによって、「八月六日」の選択肢は確実に残されたことになる。投下期限は、指摘するまでもなく、ソ連参戦日とされた「八月八日」（実際には八月九日）であった。

前記したとおり、この「8月6日」という原爆投下日が、偶然にも（？）昭和20年の旧暦における靖国神社創建日（6月29日）と一致したことによって、この日は、二重の意味で歴史的刻印を帯びた忘るべからざる日——宗教学者のM.エリアーデの言う「聖なる時

間」——となったのだと言ってよい（筆者はこのように時間的側面から靖国神社と広島への原爆投下の関連性を指摘したが、空間的側面から両者の関連性を論じたのが姜尚中〔カン・サンジュン〕氏の「靖国とヒロシマ——二つの聖地」〔中野晃一＋上智大学21世紀COEプログラム編『ヤスクニとむきあう』所収、51頁以下、めこん社、2006年〕である。しかし姜氏は、日本人は、アジアの国々からすれば「矛盾」する存在の靖国神社と広島を「聖地」として受け入れていて、多くの日本国民にとって靖国は「密教」であり「ヒロシマ」は「顕教」であるとし、両者の関連性は未整理のままだとする。「このふたつは明らかに日本の戦後六〇年という楕円の二つの中心なのである。』。とするならば、その日付けは逆に、原爆投下の主体である当のアメリカにとっては、今上天皇に限られる「12月23日」とは異なり、「アムフォルタスの傷」の如く、長きにわたり癒され難い傷ともなりうるのではないか（リヒャルト・ワーグナーの舞台神聖祭典劇『パルジファル Parsifal』〔1883〕における「アムフォルタスの傷」は、劇中の「神託」を通じて、「清き愚か者 der reine Thor」のみがこれを治癒できるとアムフォルタスに告げられる。祭典劇において「清き愚か者」の役割を果たすのは、外題役のパルジファルである〔Gesammelte Schriften und Dichtungen von Richard Wagner Zehn Band, S.333, 1976 Georg Olms Verlag, Hildesheim. 〕）。

歴史は不可逆的である。時計の針を逆戻させることはできない。しかし、「聖なる時間」は繰り返される。エリアーデの表現を用いれば、「聖なる時間」は「幾度でも限りなく繰り返すことが可能であり」、「それはいつも同じであり、変わることもなければ尽きることもない、存在論的な〈パルメニデス的な〉時間」(M・エリアーデ著、風間敏夫訳『聖と俗』、60頁、法政大学出版局、1973年)である。原爆投下によって無慈悲にも「非存在」とされた広島の十数万もの人びとの生命は、太陽暦の「昭和20年8月6日」という「存在論的な〈パルメニデス的な〉時間」、すなわち、永遠に同一性を保持する「時間」の中に蘇るのである。そして、この太陽暦の年月日の背後には、太陰暦の「昭和20年6月29日」という靖国神社創建日が控えていて、文字通り表裏一体の関係をなしていたことも、その都度想起されてよいのである……我が国の歴史の存続する限りにおいて（もちろん、あの「12月23日午前0時1分」もまた「存在論的な〈パルメニデスの

な〉時間」にまじう。筆者の『ゴジラ』シナリオ案におけるこの時間指定は〔56頁参照〕、そのためのものでもある……映画が完成され上映され続ける限りにおいて）。先に、原爆を投下したアメリカにとって、長きにわたり癒され難い「傷」と筆者が記した所以である（原爆投下の問題は別としても、近年のアメリカの歴史認識の中に、「対独戦に比べ、太平洋での戦いにおける米国の道徳的優位性がかなり曖昧であった」とする考え方が始まっているという〔福井義高青山学院教授の「さらば、『正義の連合国』史観』、『正論』2012年1月号、145頁、産経新聞社〕。しかも、この論調は、ニューヨーク・タイムズ傘下のボストン・グローブ紙という「リベラル有力紙」に現れたのであり〔2005年5月8日の対独戦勝利60周年に際して掲載された「良き戦争はどれほどよかったか」における〕・ウィートクロフトの見解〕、ここでは、「対日戦」が「対独戦」とは「質的に」異なっているとされ、前者は「通常の帝国主義戦争」と見做されるに留まらず、「米軍が日本兵に投降を許さず、『玉碎』を強いたことにまで言及」されているという。こうしたアメリカの「道徳的優位性」の揺らぎは、もしかすると、先の「傷」のひとつの現れと言えるものかも知れない。

それでは、原爆投下によってかりにアメリカの受けた「道義的」な「傷」が深いものであったとして（ただし、オバマ大統領の「プラハ演説」における「道義的責任」の言及がそのひとつの反映であったと仮定しても、この「責任」が原爆投下に対する直接的なものではなく、むしろ米国が今後取るべき「行動への道義的責任」〔朝日新聞、2009年4月6日付〕であるとした点は留意しておくべきであろう）、アメリカにパルジファルに相当する人物は出現しうるのだろうか。ピュア pure（清らか）にしてルーピー loopy（愚か）な人物——と表現したら悪趣味の謗りを免れまいが——の登場を期待することはできるのだろうか。もちろん、この問い自体は比喩の一種であって、劇中のパルジファルに相当する特定の個人の出現のみを想定しているのではない。ここでこのような問いを発したのは、「傷」を治癒しうるパルジファルの属性を持つ国家意思——たとえば民主的な意思を代表ないし体現しうる個人や人びとや組織——が現実には現れるかどうかに思いを巡らしてのことであった（パルジファルは、「共苦 Mitleid」を通じてのみ、アムフォルタスの「傷」を治癒しうる定めにあった。現実世界におけるこの「共苦」の主体が誰であれ、アメリカの負った「傷」

を治癒しうる者は、原爆の被害者に「共苦」を寄せうる者、すなわち、原爆の被害者の苦しみ [Leid] を共に [mit] できる者でなくてはなるまい)。しかし、これもまた想像であるが、アメリカ大統領の誰かが近い将来に広島や長崎のグラウンド・ゼロを訪れたとき、原爆不投下の場合にアメリカだけで百万の犠牲者が出るとしたヘンリー・スティムソン陸軍長官の論文（1947）の趣旨を改めてその大統領が明言することなど「あり得ない」と断言できる人は、我が国に恐らくいないのではあるまいか。

原爆投下に関する大義名分論の総元締めは、鳥居民氏によると、このスティムソン陸軍長官である。以下、鳥居氏の前掲書（『原爆を投下するまで日本を降伏させるな』）の中から引用する。「戦後、スティムソンは大統領とアメリカの名誉を守るために、トルーマンの原爆使用を徹底して弁護し、それが誠心誠意の態度とみせかける努力を払った。一九四七（昭和二十二年）一月号の『ハーバース・マガジン』に文章を発表して、大統領とアメリカ政府の責任ある人物のなかで原爆の軍事利用に反対した者はいなかったのだと主張し、そのときに日本は強力な軍事力を持っていたのだと説き、日本の首相はわれわれの最後通牒を拒否したのだと述べ、原爆を投下しなければ、アメリカだけで百万人の犠牲者がでたのだと主張し、広島は陸軍の中心、長崎は海軍と工業の中心であったと言ったのである」。これに続けて鳥居は、スティムソンのこうした主張が戦後長く「歴史研究者」や「歴史教師」のような専門家の間ですら信奉され、多くの人がこの主張を「まごうかたなき事実だと思い違いをした」と批判している（前掲書、264頁）。しかしながら、現実問題として、もしもアメリカ大統領がいつの日にかスティムソンのこの主張を「まごうかたなき事実」として被爆地で改めて述べたとしたら、被爆者はもとより国民は、これを「思い違い」の発言として拒否したり、あるいは逆にこれを受け容れたりすることが果たしてできるのだろうか。筆者にとってこれは想像し難いことである。

余談ながら、ここに内部告発サイト「ウィキリークス」による先頃の米国外交公電記載関連の報道について記しておきたい。この報道によると、平成21年11月のオバマ米国大統領初来日の二か月前に、数中三十二外務省事務次官（当時）は、オバマ大統領の広島訪問が「時期尚早」であるとアメリカ側に伝達したという（朝日新聞、2011年9月28日付）。在日アメリカ

大使館発によるこの公電は、数中氏が「時期尚早」の理由として、「オバマ大統領が広島で原爆投下を謝罪する見込みがないことをあげた」と伝えていた。言うまでもなく、大統領の「謝罪」はスティムソンの主張の否定に直結しかねない。

なお、現在外務省顧問である数中氏は、ウィキリークスの件で「コメントはしない」という外務省の方針に則って朝日新聞の取材に同様の回答をしたが、かりにこの伝達が真実であるとした場合、それはアメリカへの過剰配慮として批判されるべきなのだろうか、それとも、やむを得ざる冷静な判断であるとして評価されるべきなのだろうか。

（2）原子力の功罪

原子力の功罪のうち「功」については、我が国では、電力の安定供給という平和利用に果たした原子力の役割という面から強調されるのが一般的である。反原発の立場に立つ人たちといえども、彼らを含めた現代人の生活が原子力の恩恵を大なり小なり受けてきたことは認めなくてはならないであろう。しかし、平成23年3月11日の原発事故を境に、原子力に対する国民の見方は大きく変わってきた。「3.11」以前であれば、政治的に保守的立場に立つ人びとは——安全保障上の観点からも——おおむね原発支持と見てよかったのに対して、反保守の立場に立つ人びとは反原発であったと見てほぼ間違いなかったように思われる。ところが「3.11」以降、この図式が大きく崩れ、保守の側にある人の中にも反原発の立場を取る人が増えてきたのである。原発に関する限り、保守・反保守の政治上の対立軸はもはや存在しないも同然と言ってよい。

筆者は、昨年来、活字メディアや電波メディアという限られた場におけるこのような状況の変化に興味深く見つめてきた。ところが、本稿冒頭に記した年少者の健康についての懸念が解消されないまま、本稿の校正段階において、イギリスの高級紙インディペンデントの記事を要約した、次のようなロンドン発の共同通信記事を読み、少なからぬ衝撃を受けた。それは、本稿のプロローグの結尾に記した筆者の願いとは相反する内容の記事だったからである。その共同通信記事の全文をここに記録として留めておきたい（なお、この記事は平成24年2月4日付の産経新聞に掲載されたものだが、筆者の目にした朝日・読売・毎日の各紙には、少なくともこの掲載日当日およびその前後の発行

日の分を見た限り、また、各紙神奈川版による筆者の見落としがない限り、共同通信記事やこれに関連した記事は掲載されていなかった)。

〈◆福島原発周辺で鳥が減少、生殖能力も低下

3日付の英紙インディペンデントは、東京電力福島第1原発の事故による環境への影響を調べている日米などの研究チームの調査で、同原発周辺で鳥の数が減少し始めていることが分かったと報じた。調査結果は来週、環境問題の専門誌で発表される。研究チームは、1986年に事故が起きたウクライナのチェルノブイリ原発と福島第1原発の周辺で、放射性物質放出による生物への影響を比較調査するため、両地域に共通する14種類の鳥について分析、福島の方が生息数への影響が大きく、寿命が短くなったり、オスの生殖能力が低下したりしていることが確認されたほか、脳の小さい個体が発見された。

(ロンドン、共同)〉

この記事を目にしてから程なくして、これもまた注目すべき内容のTVドキュメント番組が放送された。ここにはその番組名とタイトルのみを記録として留めておきたい。

〈ドキュメント'12「ママ、わたし子供が産める？原発事故…我が子の尿からセシウムが」(日本テレビ、平成24年2月13日放送)〉

筆者は、原発事故以来、論壇における原発継続派と原発廃止派の意見を見聞きし比較考察している中でのこれら二つのメディアの報道に接し、人間も含めた自然にとっては、原子力そのものが存在を許されざる力(=エネルギー)ではないかと考えるようになった。その理由をごく簡潔に記せば、軍事面の原子力の使用を人間の英知で制御することは完全に不可能であるとまでは言えないにしても、平和利用としての原子力の方は、これを人間の英知で完全に制御することは不可能であると理解したからである(すなわち、軍事利用の原子力についても結果的に中断とならざるをえない)。トルーマン米国大統領は日記の中に原爆を「終末の火」と記したが(注14の71頁参照)、筆者には、原爆にとどまらず、原子力そのものを「終末の火」とする一般認識が形成されるべき段階にきたのではないかと考えざるをえないのである。

チェルノブイリ原発事故の発生から数年後、彼の地

の新しい生命にどのような悲劇が起こったかを筆者は我が国のある国際情報誌の写真報道で知った。そのときには、チェルノブイリないしその周辺における悲劇が極めて深刻なものであることを理解しつつも、結局は、「対岸の火事」としか受け留めることしかできなかったのである。まことに浅はかなことであった。しかし、その火の手は、千年に一度の大地震によって我が国でも突如として燃え上がり、彼の地の悲劇が我が国でも起こりうるものが現実の問題として迫り来つつあるのである。

原子力は、たとえ徹頭徹尾平和利用を目的としたものであっても、一旦事あらば空間を汚染するのみならず、時間をも汚染するのである。なるほど空間の汚染は、除染技術の改良進歩によって克服不可能とまでは言い切れまい。しかしながら、時間に関わる汚染の除去技術は、すなわち(数世代にわたる)遺伝子レベルの破壊修復や破壊防止を可能にする技術は、果たして実現可能なのだろうか。かりにその技術が実現可能だとしても、それに要する時間はどれほどの規模なのだろうか…。

渡部昇一・上智大学名誉教授は、本年、「原発興国論」と題する論考を発表した(『Will』4月号、ワック出版)。副題には「明るい未来の道筋」とある。このことから伺えるように、これは原発肯定論である。渡部氏はここで内外の種々の研究成果を基に、たとえば、DNAの傷を修復する酵素は「低線量の放射線被曝によって活性化する」(41頁)という学説を紹介する一方、低線量の放射線による人体への影響について「科学的根拠はないことをわれわれは知らなければならぬ」(44頁)と記し、土壤汚染についても、ウェード・アリソン・オックスフォード大学名誉教授が「土壌をはいで除染することも愚の骨頂だと断言している」(45頁)と記している。さらに、3月10日付の産経新聞「主張」欄は、「原発事故1年 世界の潮流を見失うな 根拠薄い『危険神話』に決別を」という題を掲げて、新聞社としての原発肯定論の論陣を張った。

渡部氏が先の論考の中で「これはという反論があれば」寄せてほしいと記したように、今後、原発肯定・否定の両派が建設的な議論を行い、放射能を正しく恐れる確実な方法を広く国民の前に示してほしいと筆者は切に願う。そして、「ママ、わたし子供が産める？」と母親に問いかける少女に、世の人びとが母親になり代わって、「大丈夫、心配しないで。周りの放射能はもう全然怖くないのだから」と言える日が一日も早く

来ることを筆者は望むとともに、その日までは、武器としての使用は言わずもがな、たとえ平和目的のためであっても、あの「終末の火」は自然界から消えてほしいと望むものである。

謝 辞

拙論を執筆するにあたり、今回もまた、幾人もの方がたからご支援を得ることができました。ここに改めて御礼申し上げます。

中でも、靖国神社遊就館権彌宜の野田安平氏は、筆者のごく初歩的な質問にも丁寧にお答え下さっただけでなく、未知の貴重な資料までご教示下さいました。このたびの論文の執筆は野田氏のこのご協力なくしては考えられませんでした。それらの資料を十分生かし切れませんでしたのは、ひとえに筆者の力不足によります。それらは今後の研究活動の中で随時生かして参りたいと考えています。

また、高橋龍太郎翁のご令孫の佐々木四郎氏には、筆者の高橋龍太郎研究の初期からご協力を頂いており、今回は、その初期に作成しました研究取材ファイルおよび拙論執筆中に頂いた書簡から一部引用させて頂きました。

さらには、本学図書館の資料提供はもとより、本学近隣の豊島区立豊島中央図書館や学生時代から通う文京区立の各図書館のご協力にも感謝申し上げます。

最後に、そもそも拙論執筆のきっかけとなったのは、本学の現代ライフ学部人間文化学科（メディア文化コース）の授業の一環として、学生諸君と共に学んだ二度の『ゴジラ』勉強会でした。そのおりに作成した、映画『ゴジラ』の製作ノートやシナリオ分析が拙論の土台を形成しています。勉強会の後で学生諸君が提出したコメントにも大いに学ぶところがありました。ここに記して謝意を表します。

注

注1) この和歌と貞観大地震を結び付けて文章に表したのは、筆者の目に入った限り、作家でもある猪瀬直樹東京都副知事が最も早かったようである。猪瀬は『ボイス』誌に『『オレ割り』政府の弊害正せ』という評論文を發表し、その中では、この歌が「津波から一世紀たって詠まれたことになる」ため、貞観大地震と大津波が当時

としてもいかに「大事件」であったかを述べている（平成23年6月号、132頁、P H P 研究所）。

なお、『古今和歌集』（905）の中の「巻第二十」に、「東歌 みちのくうた」の一首として、「君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山波もこえなむ」が収められている。「すゑの松山」は、この東歌によって平安の都の人びとにも親しまれていた「名所」であり、「海の波が越えることのあり得ない山だという」意味がこの歌に込められた（『古今和歌集』、久保田章一郎＝校注、84頁、角川文庫、昭和63年）。清原元輔の先の歌も、この東歌を踏まえて詠まれたものである。

貞観大地震については、東日本大震災以後広く知られるようになった『日本三大実録』（901）に記録が残されている。以下にその記録部分を抜き書きしておきたい。地震の描写は、この部分の冒頭から6行目の「…數を知らず」までであり、これに続く「海（みなと）口は…」以降が、大津波の叙述である。

「（五月）二十六日 癸未、陸奥國、地大に震動りて、流光晝の如く隱映す。頃之人民叫呼び、伏して起つ能わず、或は屋仆れて壓され死に、或は地裂けて埋れ殞にき。馬牛は駭き奔りて或は相昇り踏む。城郭倉庫、門櫓牆壁の顛落れ顛覆るものは其の數を知らず。海口は哮吼えて、聲雷霆に似、驚濤涌潮り、浜洄き漲長りて忽ちに城下に至り、海を去ること數十里、浩浩として其の涯涘を辨へず、原野も道路も惣て滄溟と爲り、船に乗るに違あらず、山に登るも及び難くして、溺れ死ぬる者千許、資産も苗稼も殆と子遺無かりき」（『訓読日本三大実録』

〔武田祐吉・佐藤謙三訓読〕、454頁、臨川書店、昭和61年）。

都司嘉宣・東大地震研究所准教授によると、地震や津波の研究は、「三陸地方では明治三陸地震（1896年）の津波がたぶん上限で、これより大きいものは来ないだろうと」考えていたので、その研究対象は、「江戸時代の初めから約400年間の記録」に限られていて、明治三陸地震が「その中で最大のもの」であった。一方で、「貞観地震の津波が明治三陸より大きかったことは地質学的に知られていた」にもかかわら

ず、「千年も昔のことがきたときどうするかを考えるのは現実的でない」として、「防災の参考にしなかった」のだという。ところが、「現実には千年前とそっくりの津波が起きてしまった」のであり、都司准教授は、『千年に一度』は無視できないと、身に染みて分かった」と述べた（平成23年11月17日付産経新聞、「温故地震」より）。

東日本大震災との関連から貞観大地震に関する報道も行われるようになり、たとえば、平成21年の経済産業省における「総合資源エネルギー調査会」で、岡村行信委員（活断層・地震研究センター長）が「貞観地震で、想定とは比べものにならない巨大な津波が来ている」と指摘していたことが明らかになった（『正論』平成23年7月号、梅原克彦「五百旗頭復興構想会議議長への〈公開質問〉」より、111頁、産経新聞社）。梅原氏のこの「〈公開質問〉」では、これ以外にも、仙台市在住の郷土史家や海洋生物学研究者らによる大地震および大津波に関する発表に言及されている。前者は、飯沼勇義氏の『仙台平野の歴史津波 巨大津波が仙台平野を襲う』であり、後者は、小崎茂・仙台一高教諭の地理巡検の資料（「合同巡検の栞」）である。梅原氏によれば、小崎教諭は巡検で引率した生徒たちに、「約千百年前、ここまで津波が来た。ゆめゆめ、来るべき大地震と津波を軽々に侮るなかれ」と語りかけていたという（前掲誌、112－113頁）。

注2）この数値は一兆の一万倍にあたる「京」という単位で示され、原子力安全・保安院の試算によると、拡散した放射性セシウムは広島原発の168発分にも相当するという。また、平成23年10月30日のNHKラジオが伝えたニュースによれば、フランスの放射能測定機関の数値として、福島第一原子力発電所から放出された放射性セシウム137の総量は2.71京ベクレルにも上るといふ。

注3）本論における映画『ゴジラ』からの科白の引用や情景説明は、原則として、隔週刊『東宝特撮映画DVDコレクション1 ゴジラ』（ディアゴスティーニ・ジャパン、2009年10月）に基づいている。

注4）菅前総理は、総理在任当時の政府部内の混乱ぶ

りをつぎのように語っている（共同通信によるインタビューの大意、9月19日付産経新聞より）：前総理は原発事故発生直後には、現場の第一原発の担当者と意志疎通できないなど対応が困難を極めたことを強調した。そして、複数の関係機関に原発事故関連のシミュレーションを依頼したところ、最悪の場合は半径200～250キロは住民避難が必要との結果を得た。これには東京のかなりの地域も含まれ、対象は3000万人にも及んだという。このため、大混乱が起きるとの思いが総理（当時）の頭をよぎり、「国が国として成り立つのかという瀬戸際だった」と前総理は述べた。

国の存亡を左右しかねない情報が国の最高責任者に伝えられたとき、その最高責任者はどのように行動するべきか、この短いコメントには、政治の任にあたる者にとって貴重な示唆が含まれている。

また、為政者がどの情報をいつ、どのようにして国民に伝えるべきかという観点から、ジャーナリストの上杉隆氏が「ジャーナリスト休筆宣言 既存メディア、震災報道の『嘘』を暴く」と題して、このたびの原発事故に関する政府や原子力・安全保安院や東京電力の発表を鵜呑みにして報じる既存メディアを批判している（『ボイス』平成23年9月号、169－178頁、PHP研究所）。上杉氏は政府当局者の記者会見における発言をそのまま記事の各項目の小見出しにして、これらの発言をことごとく否定し、無批判にこれらを伝えた既存メディアの現実を文字どおり暴き出している。かねてから記者クラブ制度に根差す報道上の欠陥を上杉氏が指摘しているのはそのとおりである。しかし、読者がこの文章を目にして抱く素朴な感想は、まず批判されるべきは、それらの曖昧不確実な情報を既存メディアに提供し続けていた側であろう。

以下に上杉氏の文章中の小見出しを順に抜き書きしておくこととする。

- ・「メルトダウンはしていません」
- ・「放射性物質は拡散していません」
- ・「半径二十 km の地域は安全です」
- ・「年間二十ミリシーベルトまで大丈夫です」
- ・「低濃度の汚染水を海洋放出しました」

- ・「海産物は食べても安心です」
- ・「農産物は食べても安心です」
- ・「工程表のとおりに収束します」

上杉氏は最後に、自身の言葉を項目の小見出しにして掲げている。

- ・「数十年たてば誰も責任をとらなくなる」

注5) 映画における国会内の委員会の政府側委員と女性議員の遣り取りは、ほぼ次のように進行する。

〈委員会の場面は政府側委員の現状報告から始まり、大戸島村長、新聞記者、そして島民がそれぞれ被害状況などを報告し、最後に古生物学の博士が科学的知見を述べる。博士は、たび重なる水爆実験によって環境が破壊され、ジュラ紀の生物が海底の安住の地を追われたとする説を述べる。さらに水爆実験の証拠として、ゴジラに付着していた粘土から水爆放射能の「ストロンチウム90」がガイガーカウンターによる放射能検出と定量分析の結果発見されたと報告する。これらのことから、ゴジラも相当量の水爆の放射性因子を帯びていると断定して、博士は報告を締めくくる。するとここで、先の政府側委員が委員長に発言を求めて立つ。

政府側委員：委員長、ただいまの山根博士の報告はまことに重大でありまして、
軽しく公表すべきでないと思います。
(周囲から大きな拍手。すると女性議員が大声で野次る)

女性議員：何を言うか！重大だからこそ公表すべきだ！（「そうだ！そうだ！」の声あり。周囲からまばらな拍手）

政府側委員：（女性議員の方を向いて）だまれ！（正面を見据えて）というのは、ゴジラなる代物が水爆の実験が生んだ落とし子であるなどという、そんなことを発表したら、ただでさえうるさい国際問題がいったいどうなるか。

女性議員：事実は事実だ！

政府側委員：軽率に公表した暁は、国民大衆を恐怖に陥れ、延いて政治経済、外交まで混乱を引き起こし…（同じ女性議員が再び大声で野次る）

女性議員：（立ち上がって）馬鹿者！何を言うと

るか！事実は事実だ。堂々と発表しろ！

（「退場！」の声あり。委員会は混乱状態を呈する）〉

注6) 実際、戦後初の総選挙（昭和21年4月）において、女性立候補者89名のうち39名が当選して衆議院議員となった。

注7) 先の大戦の我が国における正式呼称は、1945年12月12日の閣議決定の手続きを経て決められた大東亜戦争である（同年12月13日付け朝日新聞の記事「大理想、直截に表現 対米英戦の呼稱決す」の中に掲載された「情報局発表」の全文を、ここに引用しておきたい：〈今次の対米英戦は、支那事變をも含め大東亜戦争と呼稱す、大東亜戦争と稱するは、大東亜新秩序建設を目的とする戦争なることを意味するものにして、戦争地域を大東亜のみに限定する意味に非ず〉）。『太平洋戦争』の呼称は、このとき海軍側から提案されていたものの却下された。『太平洋戦争』が用いられるようになったのは、佐藤優氏の『新世界秩序 intelligence database 特別版、第146回』（『サビオ』2011年12月28日号、16頁、小学館）によれば、戦後、GHQが「大東亜戦争という言葉が公文書で用いないように指令した」ためだという。また、同じく佐藤氏によれば、「大東亜戦争を太平洋戦争に名称変更するという日本政府の決定はなされていない」ので、先の閣議決定による大東亜戦争という呼称は「取り消されていない」のだという。

注8) この「GHK」のロゴは、テレビ・カメラのボディにも見られる。

我が国のテレビ時代の幕開けは1958年である。この年の2月にNHKがテレビ本放送を開始し、同年8月に日本テレビがこれに続いた。8月時点でのテレビ受信契約数はわずか3,000に過ぎなかったという。『ゴジラ』公開の翌年（1955年）でも、テレビ普及率は2.8%という当時あって（内閣府「平成15年版家計経済の動向」による）、映画『ゴジラ』を通じて、ニュー・メディアたるテレビの果たす役割が広く国民の間に伝わったであろうことは疑いない。つまり、この映画では、発信側であるテレビ中継スタッフの場面と、テレビの実況中継を見る受信側の場面が――筋書きの上で各々別個

に現れたとはいうものの——スクリーンの上に印象的に展開されたことによって、報道メディアとしての、また、当時における最先端技術としてのテレビの機能がいち早く国民の前に示されたという意義はきわめて大きかったと思われる。

映画に対するGHQの検閲については、昭和21年9月30日に「日本における太平洋陸軍民間検閲基本計画」第二次改訂版に概要が載っている。それによると、CCD（民間検閲支隊）部内に新聞映画放送部（Pres, Pictorial, and Broadcast Division, PPB）が新設され、この「計画」の第八項目「新聞、映画および放送検閲の業務」における「B.業務の理論」の第4番目に「映画等」が挙げられている。以下に、これを参考までに記しておきたい。「日本のニュース映画プリントは試写の段階で検閲される。日本で制作される一切の映画に対して同じシステムが適用される。これに加えて、宣伝媒体に属する他の娯楽も検閲を受ける」（江藤淳『閉された言語空間 占領軍の検閲と戦後日本』、182頁、文藝春秋社、平成元年）。

注9）この放送局員の懸命のアナウンスや殉職の姿は、東日本大震災における多くの人びと——警察官や消防署員や町内会の役員など——が己の職務のために尊い命を落としたことを想起させる。そうした人びとのうちで、筆者がまず想起したのは、津波の緊急放送に携わる若き女性職員による住民避難の必死の呼びかけであった。と同時に、先の大戦終結直後の8月20日に、攻め寄せるソ連軍を目前にしてみずから青酸カリを仰ぎ殉職した樺太・真岡の9人の女性電話交換手たちのことも記憶の中に蘇ってきて、『ゴジラ』を見てしばらくした後も、これら放送局員と女性職員と電話交換手のことが折り重なってひとつのイメージを形成し、脳裡から消え去ることがなかった。

女性職員のあの必死の呼びかけの報道に接して、筆者と同じく樺太の電話交換手の殉職を想起した人は少なからずいたはずであり、国学院大学の大原康雄教授もそのひとりであった。大原教授は『歴史通』（平成23年9月号、ワック出版）に「遠藤未希さんと 真岡 九人の電話交換手」と題して一文を草し（58頁以下）、現代

の宮城と往時の樺太における人びとの殉職を惜しみつつ讀んでいる。

伝えられるところによると、真岡の電話交換手の訣別の言葉は、「皆さん さようなら さようなら これが最後です」であったという（北海道・稚内にある「殉職九人の乙女の碑」に書かれた碑文より。金子俊男『樺太一九四五夏——樺太終戦記録——』、327頁、講談社、1972年）。この訣別の言葉は、『ゴジラ』における放送局員の残した最後のメッセージとほぼ同一である。ただし、この言葉と放送局員のメッセージの間に引用関係はないようである。先の碑文の年月日が「昭和38年8月15日」であることからすれば、この悲劇の事件は、すでにこの時点である程度世に知られていたこととなる。しかし、川嶋康男『永訣の朝』（河出文庫、2008年）では、この事件は、あくまで戦後の「引揚げ者たちの間に伝わっていたに過ぎ」ないものであって、昭和40年に『通信文化』（通信文化社）誌上に発表された「元真岡郵便局長上田豊蔵氏の『交換台に散った九人の乙女』の真相」という『手記』が初めて『九人の乙女』の悲劇を伝え「たのだと記しているからである（7頁）。川嶋氏の説に基づけば、昭和29年完成の『ゴジラ』を製作するに際して、製作者サイドが樺太や北海道などからの「引揚げ者」から秘話を耳にしたり取材したりしていた可能性は皆無ではないにしても、きわめて低いと見た方が妥当であろう。記念碑の建つ10年以上も前に、あの訣別の言葉が、たとえば『ゴジラ』の原作者の香山滋氏や脚本担当の村田武雄氏および本田猪四郎氏に伝わっていたとは考えにくいのである。

なお、ひとつ付け加えておくと、川嶋氏の前掲書の碑文からの引用は、「皆さん これが最後です さようなら さようなら」となっていて、「これが最後です」の位置が金子氏の前掲書とは異なっている。また、ついでながら、戦前の樺太・真岡を舞台にした戯曲が映画化されていて、昨春に雑誌の付録（DVD）として世に出たことも記しておきたい（『新潮45』3月号、新潮社）。山本有三原作による『生命の冠』（内田吐夢監督）がそれである。封切りは昭和11年である。ただし、舞台設定は樺太の真岡なのだが、オールロケ敢行の地は北方領土の国後島で

あったという（前掲誌、96頁）。ここには当時の蟹漁の厳しさや蟹缶製造工場の現場の様子が描かれていて、とりわけ、国後島における実写と思われる少女たちの懸命に働く健気な姿は、あの真岡の電話交換手たちもかくやと思わせるものがある。

このたびの大天災や原発大事故に立ち向かう人びとの姿は、国境を越えて多くの人たちの共感や感動、あるいは悲嘆の声を呼び起こした。その記録として、ここにふたつの記事を引用しておきたい。そのひとつは、「福島第一原発の英雄たち」と題するバリ発の共同電による記事であり、「スペイン皇太子ゆかりの賞を受賞」という大きな見出しが掲げられた（平成23年9月9日付産経新聞）。同記事によると、スペインのアストゥリアス皇太子基金は9月7日、今年と同皇太子賞の「共存共栄賞」を、福島第一原発事故の現場で事故の拡大を防ぐため献身的な働きをした東京電力やその下請け作業員、消防、自衛隊員らの「フクシマの英雄たち」に授与すると発表した。同基金は授章理由を「勇敢で模範的な行為」とし、「自らの命を犠牲にしても津波による原発の惨禍を避けようと闘った。彼らは人間としての卓越した価値を示してくれた」と評価したという。映画の中のあの放送局員もまた、命を賭して「勇敢」かつ「模範的」に職務をまっとうした人として、映画の中の隠れた「英雄（ヒーロー）」のひとりに数え入れられよう。

もうひとつは、消防団員についての記事である。2011年12月16日付けの朝日新聞夕刊に、つぎのような見出しの記事が掲載された。

「震災で犠牲の消防関係者281人 11年消防白書」。

同記事に引用された「消防白書」によると、「犠牲になった団員の多くは、避難誘導や水門の閉鎖などに取り組む中で、津波に襲われたとみられる」という。

注10) ただし、原田実『怪獣のいる精神史』（194頁、風塵社、平成7年）では、ここでの科学的根拠を「疑似科学的説明」とし、たとえば、劇中の山根博士が「200万年前」と言っているジュラ紀は、「通説」では「今から約二億一千万年～一億四千万年前とされている」と指摘する。ま

た、山根博士の言う、「海棲爬虫類が陸生獣類に進化した」などというのは、「動物分類学上の常識からいってありえない」とする。

注11) 映画『ゴジラ』では、巨大生物が放射能を帯びていることを証拠だてるものとして、「ストロンチウム90」の存在が挙げられた。生活全般にわたって放射能とは何の縁もなかった筆者にとって、ストロンチウム90なる放射性物質の名称は初耳であった。本学のメディア文化コースのフレッシュおよびアドバンス・セミナーで映画『ゴジラ』の勉強会をしていた頃、偶然とはいえ、ストロンチウムというこの物質名が新聞紙面に載っているのを見て、筆者は一驚した。すなわち、2011年6月1日付けの朝日新聞夕刊一面に、原発事故の余波の記事が掲載され、次のような見出しが打たれていたのである。「魚のストロンチウム検査 水産庁 福島第一原発沖で」。この記事では、それまでの食品検査は放射性ヨウ素とセシウムのみが対象であり、ストロンチウムの検査はこれが初めてであると報じられた。

さらに下って、10月13日付けの産経新聞には、「横浜でストロンチウム原発100キロ圏外初」という見出しのもと、「ストロンチウム90が民間の検査機関の測定で検出」された事実が伝えられた（この続報は、11月25日付の産経新聞「神奈川」面に掲載され、見出しは、「横浜ストロンチウム『原発事故と無関係』」であった。同記事によると、文部科学省は、「より精密な手法で分析を実施したところ、ストロンチウムの値は原発事故が起こる前に全国で実施された値の範囲内だった」として、このストロンチウムは「福島第一原発事故とは関連がない」と結論づけた）。

注12) たとえば、この映画の準主役級に相当する登場人物の「尾形秀人」と「山根恵美子」と「芹沢大助」の三人の関係は、我が国の近代文学における伝統的な男女三角関係を形成していると捉えられている（佐藤建志『さらば、愛しきゴジラよ』[147頁以下、読売新聞社、1993年]や加藤典洋『さようなら、ゴジラたち』[149頁以下、岩波書店、2010年]など）。

注13) ラフカディオ・ハーン（1850—1904）がいまから百年以上も前に書いた「祖先崇拜の思想」

（『心－日本の内面生活の暗示と影響－』所収、255頁以下、岩波文庫、1985年）の中に、「神道の信仰」と「近代科学の知識」の「両立」に関する興味深い記述がある。ハーンによると、外国の（おそらくはキリスト教徒の）「批評家」たちは、「日本の科学的進歩の事実」と日本における「祖先崇拜」の堅持というふたつの「事実」を、「ひとつに結び付けて考えることができない」と「自白」しているという。その彼らが言うのに、日本における「科学の専門家」として世に名をあらわしているような人たちが、いまだに家にまつてある神棚や祠を拝んだり、鎮守の森の社の前で額ずいたりするなんて、そんなことがあるわけがない」のだそうである。そうした日本の「信仰」は、（ヨーロッパと同じく）すでに減びていて、「形式」だけが残っているに過ぎず、「今よりもっと教育が進めば、神道などは、儀式としてさえ存続することはおぼつかなくなるのではあるまいか」と彼らは畳み掛けるのである。

しかしながら、本論に見たとおり、我が国における21世紀の今日にあっても、すべては事実が証明している。

ハーンが著したこの『心』は、19世紀末の1896（明治29）年にアメリカのボストンとイギリスのロンドンで同時に出版されている。ハーンは日清戦争（1894－5）前後の頃にこの本を書いたと思われるが、明治維新からわずか三十年足らずで西洋人の「批評家」たちにかく言わしめた日本の科学者たちと同様、現代を代表する科学者たちもまた、鎮守の森の社に額ずいているのである。いまを生きる西洋人の科学者や批評家が、現代の日本において科学者たちのそうした姿を目の当たりにしても、彼らはこれをいかにも日本人らしい、ごく自然の振る舞いとして受け止めるに違いあるまい。

もう一点、本論の副次的テーマである原子力問題に関連して付け加えておきたい。昨年原発事故以来、ポスト原発に関する論議が声高に交わされたが、事故から半年ほどが過ぎて、おおそ議論の方向が定まってきたようである。大別して

（１）原発を廃止して自然エネルギーなどの代替エネルギーに活路を見出す

（２）原発を改良して安全性を高め、原発による電気供給を当面継続する

の２点となるように思われる。その中で特異なのは、（２）の範疇に入る、「安全な原発」であるとされるトリウム溶融塩炉である（以下、堤堯「ある編集者のオデッセイ 文藝春秋とともに〈続・「安全な原発」はなぜ潰されたか？〉」による。『Will』平成23年12月号、296頁以下、ワック出版）。

このトリウム原発は、我が国ではいまだにほとんど議論の対象にすらされていないが、旧ソ連やフランスやチェコやインドなどの国々などで研究が進められたり絶えず関心を寄せられたりしている技術である。このトリウム原発の我が国における第一人者は、古川和夫氏である。古川氏は、先の国々から様々なアプローチを受け、中には国際的な産業スパイまがいといしか言ひようのない災難にも遭遇したりしている。このことは、トリウム原発に関してはそれほどまでに古川氏の国際的評価が高いという証明でもあろう。筆者が興味深く思ったのは、トリウム原発もさることながら、当の古川家が水戸藩の旧家であり、金砂神社の祭主も務めたという点である。古川氏の自宅を訪問した元『文藝春秋』編集長の堤堯氏によれば、神棚には「西金砂神社」の御札が飾られ、田楽の楽面が「数面、壁に掛けられて」いたという。古川氏にとって、この神棚に拝礼することは、いまなおごく日常生活風景の中の一齣であると言ってよいであろう。これもまた、最先端の技術を専門とする科学者が、神道を自然に受け容れているひとつの姿である。

注14) 戦争という極限状況が平生の精神状態を多く損ねることは、往古の時代からよく知られた事実であった。先の大戦も、その例外でなかったことは言うまでもない。

頭脳明晰なはずの科学者、それも医師という高度な科学的知識を身につけた人たちの、戦時における精神状態を物語る次のような表現が、ある雑誌に記されていた。大戦当時、中国大陆に派遣されていた「七三一部隊」に関する記述である（保阪正康「是認できない行為」『中央公論』、249頁、1996年2月号、中央公論社）：〈当時、人体実験に使われた人たちのことを

七三一部隊の軍人、医師などは「丸太」と呼んでいた。人間を人間と思わない表現を用いることで、彼らは日々の心のバランスを保っていたのであろう。

イギリスのウィンストン・チャーチル（1874－1965）は、大戦時にイギリスの宰相であったことから、我が国の歴史教科書に必ずその名が登場する人物である。このチャーチル首相が、アメリカの F. D. ルーズヴェルト大統領に対して、欧州戦線の戦局の関係からアメリカが我が国に参戦することを強く促していたことは史実としてよく知られている。ジャーナリストの櫻井よしこ氏によると、対ドイツ戦の最中の1940年5月に首相に就任したチャーチルは、「就任5日後の5月15日付けでルーズベルトに送った手紙の中で、日本を『Japanese dog』（日本野郎）と口汚く呼び、対日戦を促し」という（『サビオ』2001年12月28日号、11頁、小学館）。ここでの罵倒語の直訳は、もちろん「日本の犬」である。これもまた、書簡中の言葉とはいえ、宰相としてはいささかバランスを失した言葉遣いと言えよう。

先の『中央公論』誌には、本来なら、国民から国父並の尊敬の念を払われてしかるべき人物——トルーマン米国大統領（1884－1972）——の、チャーチルと同水準の言葉遣いが見られる。参考までに、これらの言葉も以下に引用しておきたい（日記に記されたそれらもまた、戦争という極限状況における特殊な例のひとつであると言って割り切らなくてはならないのだろうか。それとも、日記の中のごく私的な言葉にすぎないと考えて、これをごく冷静に受け止めなくてはならないのだろうか。たとえ私的な言葉であるとしても、それは、通常の状態から逸れた言葉遣いではなかったかと、筆者には思われてならない。「七三一部隊」の軍人や医師が人間を「丸太」と呼んで、「日々の心のバランス」を保ったのだとすれば、トルーマン大統領が、たとえば、日本人を指して「獣」と日記に書き記したのも——チャーチルの書簡中の挑発的言辞とは異なり——、もしかすると、精神上の平衡を保つためであったのかも知れない。これは、言い換えれば、心理学上の一種の補償と見做すこともできよう。いずれにせよ、米国

の最高指導者たる大統領の脳裡に発したこれらの日記中の言葉もまた、筆者としては、「政治の狂気」の変種と見做さざるをえないのである。

石田英一郎が先の小文の中で、「東条程度の頭の持ち主」と書き記したことは、見たとおりである。この表現が具体的にどのような意味を持つのかは、この短い文章からは判然としない。文脈から察すると、これは、東条には「将の将たる器に欠けるところがあり、総理の座にある者にしては統率力や判断力の面でも平凡な人物」と読み取れる。他方、その「程度の頭の持ち主」とされた東条の、米国における政治上のカウンターパートたるトルーマン大統領が日記に書き留めた言葉を見れば（日米の最高権力者としての両者の在任時期は一致しないが）、そのような言葉遣いをする人物が、よくぞあの重大極まりない原爆投下の決断を下し得たものと驚かざるを得ない。二発の原爆を我が国に投下する命令を下したトルーマン大統領は、原爆および日本人について、日記の中に次のように記しているのだという（パートン・バーンスタイン〔スタンフォード大学・歴史学教授〕著「検証・原爆投下までの三百日」『フォーリン・アフェアーズ』所収、前掲誌、387頁以下）：〈一九四五年七月二十五日に、トルーマンは原爆の膨大な破壊力が実証されたことを伝える熱を帯びたレポートを受け取り、「われわれは世界の歴史においてもっとも恐るべき兵器を完成させた。これは、予言者の言う終末の火なのかもしれない」と日記に記した。そして、京都の代わりに長崎と小倉という都市を明記した原子爆弾の投下目標の最終リストを承認する段階になると、トルーマンの態度は微妙に変化していき、トルーマンはこう記した。「私は、スチムソン陸軍長官に対して、（原爆の投下目標は）軍事施設、兵士、水兵であり、女性や子供ではないと語った。たとえジャップが、残忍かつ向こう見ずで、情け容赦なく、しかも狂信的だとしても……原爆が投下されるのは、純粋な軍事目標である」。／のちに、二発の原子爆弾の投下により膨大な規模の犠牲者がでたことに胸を痛めたトルーマンは、民間人には（原子）爆弾を使用すべきではないという旧来の道徳的価値観へと回歸しつつあったが、他方、通常爆弾による

都市への大規模攻撃の継続を認めた結果、焼夷弾、その他の爆弾によって多くの人々が犠牲になった。八月十日から戦争が終わる十四日の四日間に、延べ一〇〇〇機の爆撃機が出撃して都市を攻撃し、日本が降伏を宣言した後も、一部では爆撃が行われた。これらの攻撃によって、一万五〇〇〇人を超える日本人が犠牲になったと推定されている。「獣（のような人間）に対処するときは、彼らを獣として扱わなければならない」とトルーマンは日記に記していた。

日記が私的領域に属するものとすれば、回顧録は、言うまでもなく、公的領域に属するものである。トルーマン大統領は回顧録の中で、原爆投下前後の言動を振り返ってつぎのように記している（ハリー・S・トルーマン著〔加瀬俊一監修、堀江芳孝訳〕『トルーマン回顧録〔1〕』、恒文社、1978年）。

- ・「原爆の第一回爆発を知らせる歴史的電報が、（一九四五年）七月十六日の朝のスチムソン陸軍長官から私（トルーマン）のところにへきた。もっとも秘密のものであり、もっとも大きな戦争効力が成功したいま、われわれは戦争に革命を与えるばかりでなく、歴史や文明の流れを変えることのできる武器を持つにいたった。このニュースは、三大国（米英ソ）の会議のためポツダムに到着した日の翌日受け取ったのである」（294頁）
- ・「もちろん私は原爆の爆発が想像以上の破壊と死傷を与えることを知っていた」（299頁）。
- ・「どこで、いつ原爆を使用するか最後の決断は、私にかかってきた」（同頁）。
- ・「この爆弾の使用を決定するにあたり、私は戦争法規に書いてある方法で、戦争の武器として間違いのないように使用することを望んだ。このことは、この爆弾が軍事目標に落とされることを望んだのである」（299-300頁）。
- ・「私はスチムソン（陸軍長官）に、その爆弾はおもな軍需生産地の中央にできるだけ近く落とすべきであるといった」（300頁）。

（ここから次項までの時間的推移の間に、トルーマンが「七月二十五日」に受け取ったとされる原爆実験レポートの記述があっても不思議はないのだが、その関連の記述はない。ここで

は、参考までに、「ホワイトハウス新聞発表」として行なわれたトルーマン大統領の8月6日付け「大統領声明」の冒頭部分を引用しておきたい。〈一六時間前、米国航空機一機が日本陸軍の重要基地である広島に爆弾一発を投下した。その爆弾は、TNT火薬二万トン以上の威力を持つものであった。それは、戦争史上これまでに使用された爆弾のなかで最も大型である、英国の「グランド・スラム」の爆発力の二〇〇〇倍を超えるものであった。／日本は、パールハーバーにおいて空から戦争を開始した。彼らは、何倍もの報復をこうむった。にもかかわらず、決着はまだついていない。この爆弾によって、今やわれわれは新たな革命的破壊力を加え、わが軍隊の戦力をさらにいっそう増強した。これらの爆弾は、現在の型式のものがいま生産されており、もっとはるかに強力なものも開発されつつある。／それは原子爆弾である。宇宙に存在する基本的な力を利用したものである。太陽のエネルギー源になっている力が、極東に戦争をもたらした者たちに対して放たれたのである…〉〔坂本義和・庄野直美監修『日本原爆論大系第一巻「なぜ日本に投下されたか」』、2頁、日本図書センター、1999年〕。

- ・「八月六日、ポツダムから帰国途上の四日目、世界を震撼させる歴史的ニュースがきた。私はオーガスタ号の乗組員と昼食をしていた。そのときホワイトハウスの地図の部屋の監視将校F・グレイハム海軍大佐が、つぎの電報を私に手渡した。／『八月五日午後七時十五分（ワシントン時間）、大爆弾、広島に投下さる。第一報によると、完全な成功』／私は非常に感動した。船上のバーンズ（国務長官）に電話して、このニュースを伝え、周囲の水兵たちに向かっていった。／「歴史始まって以来最大のことが起こった。さあ急ぎ帰国しよう」／数分後に第二電報が到着した。／『広島に原爆投下、戦闘機の抵抗、対空砲火ともになし。あらゆる点において、明らかに成功す』／これを読んだとき、私は食堂にいた乗組員たちに一言申し上げたいと呼びかけた。私は彼らに一トン爆薬の二万倍の力のある爆弾を投下したことを伝えた…」（同書、302頁）。

さて、トルーマン大統領は原爆投下の報告を受けたとき、投下された原爆が「純粋な軍事目標」を外さなかったことを成功電報によって確信したのであろう。しかし、広島上空で炸裂したその原爆の下で、「軍事目標」の破壊と共に二十数万の無辜の民が命を落としたことなどは、たぶん想像の外であったに違いない。ましてや、原爆症の苦しみが多くの人びとを襲い、戦後長く苦しめることになるとは思ひも及ばなかったに違いない（バーンスタインの先の記述によると、「民間人」に原爆を使用すべきではないという、「旧来の道徳的価値観」にトルーマンが戻りつつあったのは、米軍が広島と長崎に原爆投下した後のことであった）。大統領が、日本人を——軍人であれ政治家であれ、また、「民間人」であれ——とにかく「獣」と見做していたことは、広島への原爆の投下「以前」でも「以後」でも変わらなかったのではないか。「以後」の通常爆弾による継続的大規模空爆や2発目となる長崎への原爆投下が、このことを問わず語りに物語っているのではないか。石田英一郎が生前にこうした経緯を知ったなら、「政治の狂気」という文脈の中で、「トルーマン程度の頭の持ち主」という表現を用いたかも知れず、その上で、このような人物が原爆投下命令の鍵を握っていたとはと、驚きかつ嘆くのではあるまいか。

注15)「目には目を、歯には歯を」は、『旧約聖書』の場合には「出エジプト記」第21章第23—25節を参照（同じこの言葉は『新約聖書』におけるキリストの「山上の垂訓」の中にも出て来るが[マタイ伝第5章第10節]、キリストはこの言葉のあとで、この報復論理を戒め否定する教えを語っている）。この言葉が日常の生活から政治・軍事の世界に至るまで、いまなお様々な状況に用いられるのみならず、時に実践すらされていることは周知の事実である。その中で、筆者の目に入った新聞記事の中から本論の趣旨と関係あると思われるものを引用しておきたい。

まず引用するのは、世評高いオバマ米国大統領の「プラハ演説」である。これは、2009年4月5日にチェコ共和国の首都プラハで行なわれた、核兵器廃絶に関する演説である（2009年4月6日付朝日新聞と、平成23年10月10日付

産経新聞「野口裕介の安全保障読本」より）。当時「プラハ演説」は世界的にも賞讃され、この演説もひとつの契機となって、オバマ大統領は同年のノーベル平和賞を授けられた。しかし、オバマ大統領が演説の中で述べたように、核廃絶は「すぐに到達できる目標ではない」のであって、オバマ大統領は核抑止力そのものを否定してはいないのである。野口裕介氏によれば、オバマ大統領の演説からは、「核兵器が存在する限り、いかなる敵であろうと抑止する」という意志を読み取れるという。時あたかも、オバマ大統領を挑発するかのようになり、「プラハ演説」の直前に北朝鮮が「長距離弾道弾ミサイル『テポドン2』の改良型と見られる機体」を日本に向けて発射して「日本上空通過後落下」したと、朝日新聞は一面トップで伝えている。このふたつの出来事が同一紙面に載った4月6日付けの朝日新聞を見ると、「プラハ演説」でオバマ大統領は限定的な意味での核廃絶（戦略核の廃絶）を述べたのであって、戦術核については触れなかったのだという野口氏の解説には説得力がある（オバマ大統領も演説の中で、演説当日の「今朝」に北朝鮮の行なった「ルール破り」の「長距離ミサイルに使えるロケット」の「テスト」に言及し、これを「挑発行為」と非難している[三浦俊章編訳『オバマ演説集』、120頁、岩波新書、2010年]）。要するに、野口氏によれば、オバマ大統領はむしろ、「核には核で対抗するという姿勢を明確にした」というのである。参考までに、「プラハ演説」におけるオバマ大統領の核兵器に関する現状認識を以下に摘記しておく。

- ・冷戦はなくなったが、何千という核兵器はなくなっていない
- ・地球大の核戦争の脅威は消えたのに、核攻撃が起こるリスクは高まっている
- ・核兵器を獲得する国が増えている
- ・核実験は続いている
- ・核に関する機密や核物質を扱う闇市場での取引が増えている
- ・核爆弾の製造技術は広まっている
- ・テロリストたちは、核爆弾を買おう、つくろう、あるいは盗もうとしている
- ・核不拡散体制のルールを破る人々や国が増え

て、もはや核不拡散体制が持ちこたえるのが難しいポイントに達してしまっている

このような認識に立っている以上、オバマ大統領が同じ演説のすぐあとで次のように述べているのは論理の必然である。「核兵器が存在し続ける限り、アメリカは安全で確実な、かつ効果的な核兵器の備蓄を維持し続けます」。すなわち、アメリカは、核兵器の国際的な「備蓄の削減」交渉を推進する意志もあれば、「唯一核兵器を使用した核保有国として（中略）行動する道徳的責任」もあり、「核兵器のない平和で安全な世界」をも求めるものでもある。これは確かである。しかしながら、オバマ大統領のアメリカは、核の抑止力を放棄する意志がないばかりか、アメリカが核兵器の備蓄をゼロにするのは、この世に核兵器が存在しなくなることであると説明しているのである（三浦俊章編訳、前掲書、116頁以下参照）。

もう一点、「目には目を」に関連してアラブ世界の例を引いておきたい。それは、「アフリカの王の中の王にしてイスラム教徒の導師」と2009年のアラブ首脳会議で自称した、リビアのカダフィ大佐の言葉である（平成23年10月21日付産経新聞）。先のリビア内乱の結果、カダフィ大佐は国家元首の座から追われてついに囚われの身となり、最後には命乞いまでしたものの銃殺される運命を辿った。そのカダフィ大佐は、1978年に小池百合子衆議院議員（日本リビア友好協会会長）と会い、小池議員に向かって次のように語ったという。「原爆を落とされたにもかかわらず、日本にはなぜ米軍基地があるのか。なぜ戦わないのか」。

日本が再度アメリカと戦えば、それは否応なく復讐戦となる。復讐戦とは、必勝を定められた戦いである。このため、占領初期の連合国軍＝アメリカ軍は、アメリカに対する日本の将来の復讐戦を恐れ、日本が二度と連合国に戦いを挑まぬよう徹底的な占領政策を施した。戦後の日本占領統治政策の基準となった『降伏後ニ於ケル米國ノ初期ノ對日方針』の第一部「究極ノ目的」には、真っ先に次のように記されている。「日本國ニ關スル米國ノ究極ノ目的ニシテ初期ニ於ケル政策ガ從フベキモノ左ノ如シ／（イ）日本國ガ再ビ米國ノ脅威トナリ又ハ世界

ノ平和及安全ノ脅威トナラザルコトヲ確實ニスルコト…」（外務省特別資料部編『日本占領及び管理重要文書集 第一巻 基本編』、92頁、東洋経済新報社、昭和24年）。

当時のカダフィ大佐は——「原爆」を口にした以上は——「目には目を」の論理に則って、「原爆には原爆を」の選択肢が被爆国の側に当然あるとの前提に基づいて、あのような発言をするに至ったのだろうか。いまとなってはもはや、これを確認する術はないのだが。

注16) これは、1954年の映画『ゴジラ』宣伝用ポスターの中のキャッチフレーズのひとつである。

注17) 本章における映画『ゴジラ』からの引用も、従前同様に、原則としてディアゴスティニ・ジャパン製作の隔週刊『東宝特撮映画DVDコレクション1 ゴジラ』（2009年10月刊）のDVDに基づいている。

注18) 筆者は、本学の旧福祉情報学科（現人間文化学科社会福祉コース）に過去数年間在籍し、各種の福祉施設の実習巡回や実習指導員との対話などを通じて、現代の福祉事業の現場に接する機会を数多く持った。グレゴールの物語に筆者のこうした体験を重ね合わせて読むとき、グレゴールの肉親とグレゴール本人の間にある、微かな交流意識と大きな隔絶感とは、筆者が見聞した福祉の現実世界の一面を多少なりとも反映していると言わざるをえない。これは、一時期とはいえ、現代の福祉事業に身近に接した者の抱いた率直な実感である。

注19) 前掲書、148頁。加藤はゴジラの持つ意味の「多元性」を第四章で次のように表現している。

「核放射能によって異常成長をとげたゴジラ」が太平洋の孤島の「大戸島」を襲う場面は、「大日本帝国陸軍に蹂躪されるアジア諸国といった面影のうちにある」。

他方、ゴジラは、「日本の国家の自存自衛と東洋の白人支配の打倒のための戦争に散った死者」であり、「アジア諸国を蹂躪し二千万の死者をもたらした侵略戦争の先兵」であり、「いまとなつては意味づけようのない否定されるべき戦争への加担者」である。これに加えて、加藤はゴジラにさらに別種の多義性——「戦後日本全体の核心部をなす構造的な多義性」——を付与する。すなわちそれは、「東京大空襲の米軍」

であり、「アジア空爆の日本軍」であり、「原水爆の落とし子であると同時に原水爆そのもの」である（前掲書、157頁）。

注20) このように、ゴジラを戦死者の亡霊と見立て、ゴジラすなわち戦死者の亡霊が故国日本に帰還するという設定は、早くは、棟田博（1909－1988）の『サイパンから来た列車』という短編小説に見られた。この作品は昭和30年に発表され、当時としては「大変世評の高かったもの」であり、「棟田の代表作の一つ」であるばかりか、「戦後における戦記文学の中での、記念碑的作品の一つ」であったという（棟田博兵隊小説文庫 第7巻、伊藤桂一による「解説」、353頁、光人社、昭和52年）。

棟田の作品においては、サイパン島で玉砕した部隊の亡霊たちが乗った列車が東京駅の終電後の「零時三十分を指そうとしたとき」に、「十四番ホーム」に「忽然と」入ってくるのだが、『サイパンから来た列車』の現代版とも言うべき、倉本聰氏の脚本によるドラマ『歸國』（平成22年）は、棟田の小説を原作としているため、ドラマの基本的枠組みは原作とほぼ同じである。ただし、棟田の小説の中には哀しみとともに慰めのある雰囲気はどこことなく漂っていたのに対して、倉本氏によるドラマ（TBS系列により平成22年8月14日夜放送）では、現代日本の救い難い悲惨な状況が描かれていた。

注21) 筆者の長年のテーマである高橋龍太郎研究の関連から、ここに書き留めておきたいことがある。それは、高橋龍太郎（1875－1967、元大日本麦酒株式会社社長、元通産相）が第二代日本遺族会の会長（在任：1954－61）を引き受けるに至らしめた内面の動機である。注の制約上詳細は省かざるを得ないが、高橋の令孫・佐々木四郎氏によると、高橋の子息・彦也元少佐の「公務死」が会長就任のきっかけになったと思われるという。今回の研究取材の過程で、筆者は、日本遺族会発行の『日本遺族通信』（昭和31年1月31日号）の中に彦也氏関連の記事（「愛児の軍刀かえる 高橋会長のよろこび」）を見つけたので、一部抜粋して以下に引用しておきたい。

まず、彦也氏についての記述は以下のとおりである。

「高橋会長の令息彦也氏（海軍少佐）は、京大卒業後、海軍予備学生として応召、十八年九月に出征したが、トラック島で無事に終戦を迎えた。しかし、人一倍責任感の強い同氏は、自ら進んで掃海作業の指揮官として居残り、連日危険な作業に従事していたが、不幸にも爆発事故により十一月に公務死を遂げた」。

つぎに、見出しにある「軍刀」の謂れはこのように記されている。

「彦也氏が応召の折に、父龍太郎氏は愛児へのはなむけとして伝家の備前長船勝光をおくったが、この軍刀は、終戦の際、米軍により処分されることを惜しんだ当時の第四艦隊司令官原忠一中将の手で、米軍司令官に記念品としておくられていた」。記事には、この軍刀が「十五年振りに海をこえて高橋会長の手もとにかえされた」事情についても触れられている。それによると、原忠一元中将の知人が米国アナポリスの海軍兵学校の博物館で偶然この軍刀を見つけ、このことを原氏に報告したのだという。これを伝え聞いた「靖国神社の岩重事務総長らが中心になり、返還要請の話がもち上がり、沢田廉三国連大使を通じ、米側に働きかけることになった。幸い終戦当時、トラック島で米側通訳官であったドナルド・バートレット氏が現在米大使館に勤務中で、同氏の熱心な奔走により、米海軍も快く返還要請に応ずることになったのである。（中略）高橋会長は『死んだせがれを迎えるような気持です。また、遺族会が米国からも認められたことは何よりも嬉しい』と感激を語っていた」。靖国神社発行の『やすくに』（昭和43年2月15日付）には、上記記事にも登場した岩重隆治崇敬者総代による「高橋竜太郎総代を悼む」と題する文が掲載されている。この中には、トラック諸島における日本海軍戦没者の最後の慰霊祭が昭和20年9月に行なわれた際に、彦也氏が原中將から命じられて書いた「弔詞」の一節が引用されているので、これもそのまま以下に抜き書きしておきたい。

「我々は今度の戦争は百年戦争になると言う決心でやって来たが、不幸にして終戦を迎えた。我々生き残った者が諸君の霊を慰め得る唯一の道は、今後日本の復興に全力を尽くすことであると思う。しかし敗戦後の日本の復興は百

年戦争に勝るとも劣らぬ難事業である。我々は祖国の復興に懸命に努力し、それをもって諸君の霊を慰めたい」。

前出の佐々木氏の仄聞するところを記すと、彦也氏の所属部隊は、機雷掃海部隊を除き帰国となったが、残留の掃海部隊長が妻帯者であったため、独身の彦也氏が自主的に申し出て掃海作業の肩代わりし、トラック島に残ったのだという。そしてすべての作業が無事終了した後、帰国を前にした部下たちが魚釣りを楽しんでいたちょうどそのとき、釣り針が引き上げられた機雷の信管に運悪く引っ掛かり、艦橋で見物していた彦也氏を含む多数の兵士が死傷してしまい、彦也氏は、氏の元に駆けつけた軍医に対し部下の治療を優先するよう命じて、やがて息を引き取ったようだ佐々木氏は述べている。海軍は彦也氏の死の経緯を知ってこれを悼み、戦後死であるにもかかわらず戦死（公務死）として扱い、二階級特進をもってその死に報いたとのことである。

なお、戦後間もなく高橋は、日本蹴球協会（現日本サッカー協会）会長の職も引き受けて、いまに引き継がれている天皇杯サッカーの創設などに尽力した（高橋の会長在任は昭和22年から昭和29年まで。筆者は数年前、NHK－BS1の天皇杯サッカーPR放送の中に高橋と思しき人物が天皇杯を選手に授与しているシーンを見たことがある。そのシーンを録画して佐々木氏に確認をお願いしたところ、「祖父に間違いない」との回答であった）。この背景には、亡き彦也氏が旧制松山高等学校と京都帝国大学の学生時代にサッカーに情熱を傾けていたことが大きく関わっていたものと思われる。事実、佐々木氏は、高橋が二十代半ばでの不慮の死を遂げた彦也氏をどれほど不憫に思い、また無念だったことかと想像できると述べるとともに、戦後の財界から政界への転身や、前記した日本遺族会会長や靖国神社の崇敬者総代（昭和31年から昭和42年まで）、それに日本蹴球協会会長などへの就任は、いずれも「単なる名誉職」などではなく、そうした役職を通じての種々の働きの中に、「息子彦也と共に、彼の分も生きたかった祖父の強い願いのようなものを感じ」と述べた。

注22)「追悼・平和祈念のための記念碑等施設の在り方を考える懇談会 報告書 平成十四年十二月二十四日」の「第一 はじめに」は、次のような言葉で始まる。「本懇談会は、昨年十二月十四日、内閣官房長官から、何人もわだかまりなく戦没者等に追悼の誠を捧げ平和を祈念することのできる記念碑等国の施設の在り方について、国の施設の必要性、種類、名称、設置場所等につき幅広く議論するよう要請を受け、今日までおよそ一年をかけて検討を重ねてきた。本報告書は、その検討結果をまとめたものである」（菅原伸郎編著『戦争と追悼』、201頁、八朔社、2003年）。

注23) 靖国神社の創建日は明治2年6月29日（旧暦）である。太政官布告による新暦への改暦は明治6年12月である。この改暦に合わせて、靖国神社のそれぞれの祭礼日は新暦に替えられたが、創建日は旧暦の日付をそのまま新暦に移行して今日に至っている。なお、この6月29日（旧暦）＝8月6日（新暦）についての言及を筆者が初めて目にしたのは、平成20年8月6日付の産経新聞「きょうは何の日」の欄においてである。ただし、この記事の掲載年である平成20年の「8月6日」は、旧暦では「6月29日」ではなく、「7月5日」にあたっていた。

なお筆者は、「昭和20年8月6日（旧暦6月29日）」という日付について、本論「補遺」の中で、宗教学者M・エリアーデの「聖なる時間」という概念に依拠しつつその意味を考察した。前もって筆者の考えを簡潔に記せば、この日が「聖なる時間」とされることによって、それは、我が国が存する限り、永遠に繰り返される「時間」となるのであり、このことは、同時にまた、交戦国アメリカにとっていつ癒えるとも知れぬ「傷」として残り続けることとなる、というものである。

注24) 記録映画『東京裁判』（監督 小林正樹、企画・製作代表 須藤博、企画・製作 講談社、平成元年12月29日のTBSによる放送の録画）の判決場面における、W.ウェブ裁判長の判決宣告の録音音声から。

注25) この日の朝日新聞一面トップには、「東條ら七戦犯 絞首刑執行さる 今晩零時三十五分に終了」の見出しが置かれ、リード部分の書き出しに

は、「総司令部渉外局特別緊急発表二十三日午前零時四十五分」とある。処刑終了後、わずか10分後の「特別緊急発表」である。当時の新聞発行に伴う編集実務や印刷能力や配送事情などを考え合わせると、GHQは、かなり以前から新聞各紙への「二十三日」の記事掲載を立案計画し、「一分」単位によるピンポイントの照準をタイムテーブルの上に合わせ、狙いどおりに、二十三日の各紙朝刊への「A級戦犯」処刑報道の掲載を実現したように思われる。

注26) 新保裕司編『「海ゆかば」の昭和』、1頁、イブシロン出版企画、2006年。中村直文・NHK取材班『靖国』（NHK出版、2007年）によると、「海ゆかば」は、靖国神社を取材で訪れた2006年8月15日にも、「参道の特設テント」で「戦没者追悼の集会を行っていた団体によって」歌われていたという（8頁）。

なお、大伴家持の作詞（ないし作詩や作歌）とされることが通例となっているこの表記については、信時潔の自筆譜では曲名の下に「大伴氏言立」とあるので、信時自身はこの「表記にこだわっていた」のだと、信時裕子氏は留意を促している（SP音源復刻盤『信時潔作品 集成』、構成・解説：信時裕子、122頁、日本伝統文化振興財団）。ここに言う「言立」とは、『万葉集』巻十八雑歌にある先の四行の歌詩に続く言葉であり（「…顧みは爲じと言立て…」）、鴻巣盛広によれば、それは、「格別に誓言を立てる」の意であるという『『万葉集全釈全六巻』第五冊、374頁、秀英書房、昭和62年』）。

注27) 靖国神社編集並発行『靖国神社百年史 資料編』、142頁、昭和59年。

注28) 恵隆之介「英米が脱帽した『海の武士道』」（『歴史通』、2011年1月号、174-181頁、ワック出版）は、先の大戦中のふたつの実話を伝えている。

ひとつは、帝国海軍の駆逐艦「雷（いかづち）」艦長を務めた工藤俊作中佐（当時）の英国艦船乗組員救助の実話である。それによると、昭和17年のスラバヤ沖戦が帝国海軍の勝利に終わった後、「雷」は海上を漂流していた英国艦隊乗組員を発見した。工藤艦長は敵兵の救助を決断し、マストに救助活動中の国際信号旗を掲げさせた。救助された英国兵は422名。工藤

艦長は英国海軍士官を前甲板に集めて挙手の敬礼をし、英語で次のようなスピーチをした。「貴官たちは勇敢に戦われた。今や諸君は、日本海軍の名誉あるゲストである」。救助されたこれらの士官は、艦内の士官室で「ディナー」を振る舞われ、「翌日、ボルネオ島の港でオランダ病院船に捕虜として全員」引き渡されたのだという。工藤艦長は戦中戦後もこの救助については黙して語らず、昭和54年1月12日に他界した。この戦中秘話を明らかにしたのは、「救助された英国艦隊側の士官で、戦後イギリス政府の外交官として活躍したサムエル・フォール卿」であった。そしてフォール卿は、平成8年に出版した自伝（『我が幸いなる人生』）の献呈の辞の中に、「私の人生に運を与えてくれた家族、そして私を救ってくれた大日本帝国海軍中佐、工藤俊作に捧げる」と記したという。

この恵氏の記事の中には、数枚の写真が掲載されている。そのうちの一枚は、日英修好150周年の平成20年に89歳の高齢をおして来日し、埼玉県川口市の薬林寺にある工藤元艦長の墓前に手を合わせるフォール卿の姿を写したものである。

もうひとつは、昭和16年12月10日のマレー沖海戦における戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」と「レパルス」の二隻を帝国海軍航空部隊が撃沈した際の出来事である。

当時、「プリンス・オブ・ウェールズ」に副官として乗船していたグレアム・アレン元大尉は、同艦と「レパルス」が沈没した後、「帝国海軍航空隊の整然たる行動が、イギリス海軍の将兵を驚かせ感激させ」たと平成16年に恵氏に語った。すなわち、指揮官機が「攻撃止め」の合図である「バンク」（飛行機の横傾斜）をすると、それまでの航空攻撃が一切止み、次にその指揮官機は、「プリンス・オブ・ウェールズ」の艦橋近くを飛行しつつ「機内から挙手の敬礼を送」ったのである。さらに帝国海軍航空隊は、

「英国護衛駆逐艦による救助活動を一切妨害しなかったばかりか」、収容した乗員を満載した英国駆逐艦隊がシンガポールに帰投するに際しても攻撃しなかったのだという。これ以来、日本人の持つ「勇敢さ」と「武士道」と「英知」に敬服するようになったと、アレン元大尉は恵

氏に語ったのであった。

イギリスは、先の大戦において戦勝国となったものの、結果的に巨額の海外資産や国内資産を失って戦後の政治経済の主役の座を完全にアメリカに明け渡した。戦後のイギリス国民の脳裡に、「もし日本と戦わずば」との思いがよぎったに違いないであろうことは、戦敗国の我が国に、「もし英米と戦わずば」との議論が事ある毎に生まれることを考えれば、あながち的外れとは言い切れまい。我が国の要人が訪英するとき、訪英に対する退役軍人らのデモや抗議活動

がいまなお報道されることも稀でないのは、それほどまでに先の大戦がイギリス国民に与えた傷は深かったのだという証左でもあろう。しかし他方では、怨讐を超えて、上記のような人びとがイギリスに存在することも事実である。後世に生きる者にできることがあるとすれば、そのひとつは、戦時における光と影の両面にわたる事実の積み重ねを謙虚に受け留め、次の世代に確実にこれらを伝えるべく努めることであろう。

(以上、文中の敬称一部略)